

ひびてむすびし
ぬらして擗ひ
上げたる

夜向ニ残更ニ寒磬盡
春生ニ香火一曉爐燃
袖ひびてむすびしみづのこぼれるを
はるたつ今日のかぜやとくらん (古今)

山寺立春
長春道

春たつといふばかりにやみよし野の
やまもかすみてけさは見ゆらん (拾遺)

紀貫之
忠岑

早春

蘆錐一蘆の萌芽
の尖りたるを錐
に喩ふ

氷消ニ田地ニ蘆錐短
春入ニ枝條ニ柳眼低
先遣ニ和風ニ報中消息
續教ニ啼鳥ニ說中來由
東岸西岸之柳遅速不同
南枝北枝之梅開落

寄樂天元積
春生白

紫塵一蕨の穂の
紫色の細粉
錐脱糝一蘆の

紫塵嫩蕨人拳手
碧玉寒蘆錐脱糝

春生逐地形序胤
和早春晴野相公

萌芽を出したる
を、史記平原君
傳に見えたる囊
中の錐の故事に
よそへてるへり

氣霽風梳ニ新柳髮
氷消波洗ニ舊苔鬚
庭増ニ氣色ニ晴沙緑
林變ニ容輝ニ宿雪紅
いはそよぐたるひの上のさわらびの
もえいづる春になりにけるかな (古今)

春暖都長香
草樹晴迎春
紀納言

ひま一すきま

山かぜにとくるこぼりのひまごことに

志貴皇子

うちいづるなみや春のはつはな (同)

正澄

見わたせば比良のたかねに雪きえて

わかな摘むべく野はなりにけり (續後撰)

兼盛

春興

花下忘歸因ニ美景
樽前勸醉是春風
野草芳菲紅錦地
遊絲繚亂碧羅天

酬哥舒大見贈
春日書懷寄東洛白樂
劉禹錫

繚亂一美しく亂
れもつれて立つ
をいふ

上陽—支那の縣の名

麴塵—萌黄色

歌酒家々花處々。莫空管領上陽春。

山桃復野桃。日曝二紅錦之幅。門柳復岸柳。風宛

麴塵之絲。

著野展敷紅錦繡。當天遊織碧羅綾。

林中花錦時開落。天外遊絲或有無。

笙歌夜月家々思。詩酒春風處々情。

もよしきの大宮人はいとまあれや

さくらかざしてけふもくらしつ (新古今)

はるはなほわれにて知りぬ花ざかり

こころのどけき人はあらしな (拾遺)

春夜

送令孤尚書赴東都 白
逐處花皆好序 紀齊名
春生 野相公
上寺望聚洛 田達音
悅者衆 菅三品
赤人
忠岑

われにて知りぬ—自分の心持によりて能く他の心も推知せらる

背燭共憐深夜月。踏花同惜少年春。

春の夜のやみはあやなしうめの花

いろこそ見えぬ香やはかくるよ (古今)

子日附若菜

倚松樹以摩腰。習二風霜之難犯也。和菜羹而

啜レ口。期二氣味之克調也。雲林院行幸 菅

倚二松根而摩腰。千年之翠滿手。折二梅花而插頭。

二月之雪落衣。子日序 尊 敬

ねの日しにしめつる野べのひめ小松

引かでやちよのかけを待たまし (新古今)

ねの日する野邊に小松のなかりせば

清正

春夜與盧回周詠花陽觀同居 白

春の夜の云々—春の夜の闇といふやつは誠に譯の分らぬやつ也、斯く梅の花の色は見えずかくすとも其香はかくればせぬものを、どうせ其位ならば色もかくさず置くがよしめつる—兼て子の日の爲めと定め置きたる千年翠—「千歳之松」といふ語史記に出づ二月之雪—梅花を詠ふ

桃

夜雨偷濕會波之眼。新嬌曉風緩吹。不言之

口先咲。

みちとせになるてふ桃のことしより

はな咲くはるにあひにけるかな (拾遺)

躬恒

桃花詩序
紀納言

曾波一會は層に
て重なる意美
人のふたへまぶ
たをいふ
不言之口史記
李廣傳「桃李不
言下自成蹊」
みちとせになる
てふ桃一西王母
の漢の武帝に獻
せし桃

暮春

拂水柳花千萬點。隔樓鶯舌兩三聲。

低翅沙鷗潮落曉。亂絲野馬草深春。

人無更少時。須惜年。不常春。酒莫空。

劉白若知今日好。應言此處不言何。

過元魏志襄陽樓口占
元稹
晚春遊三松山館
菅丞相
春光細賦
小野篁
深春好
源順

野馬一陽炎也

劉白一劉禹錫と
白居易との贈答
の詩を劉白唱和

集といひ、其第
一首初句に「其第
處春深好、春深
富貴家」

はな見てくらすはるぞすくなき (家集)

興風

三月盡

いたづらに過ぐる月日はおほけれど

留春春不駐。春歸人寂寞。厭風風不定。風起

花蕭索。

竹院君閑消永日。花亭我醉送殘春。

惆悵春歸留不得。紫藤花下漸黃昏。

送春不用動舟車。唯別殘鶯與落花。

若使韶光一知我。意。今宵旅宿在詩家。

留春不用關城固。花落隨風鳥入雲。

けふのみと春をおもはぬときだにも

送春
同
三月盡
同
敬

落花古調詩

酬二皇甫賓客

題二慈恩寺

菅

同

同

同

はありと思ふ時
すら花の蔭は立
ちうきにまして
今日のみと思ふ
去り難し立ち

たつことやすき花のかけかは (古今)
はなもみな散りぬるやどはゆく春の
ふるさとこそなりぬべらなれ (拾遺)
またもこん時ぞと思へどたのまれぬ
わが身にしあれば惜しきはるかな (後撰)

躬 恒
貫 之
同

閏三月

金陵一三國の吳
以後南朝の都た

はるくけられる
一月ありて春
の一月加はる意

今年閏在春三月。 剩見金陵一月花。
歸谿歌鶯更逗留於孤雲之路。 辭林蝶還翻
於一月之花。
花悔歸根無益悔。 鳥期入谷定延期。
さくらばなはるくはよれる年だにも

送淮南李中逐行軍
陸侍郎
今年又有春序
源順
滋藤

人のこころにあかれやはせぬ (古今)

鶯

蘆箏一箏は笛
也、蘆の芽也

燕姫一漢の成帝
の妙手として有
名也
周郎一吳の周
瑜音樂に通ぜ
り吳志に時人
語曰曲有誤周
郎下詩此
語による

鷄既鳴忠臣待旦。 鶯未出遺賢在谷。
誰家碧樹鶯啼而羅幕猶垂。 幾處華堂夢覺而
珠簾未卷。
咽霧山鶯啼尚少。 穿砂蘆箏葉纒分。
臺頭有酒鶯呼客。 水面無塵風洗池。
鶯聲誘引來花下。 草色拘留坐水邊。
感同類於相求。 離鴻去鴈之應春轉。 會意氣
而終混。 龍吟魚躍之伴二曉啼。
燕姬之袖暫收猜繚亂於舊拍。 周郎之簪頻動

鳳爲王賦 賈 鳥
春曉鶯賦 謝 觀
早春尋李校書 元 積
和思黯題南莊 白
春江 同
鳥聲韻管絃一序 菅三品

問關鳥の啼ずる聲

顧間關於新花

同題

新路如今穿宿雪

舊巢爲後屬春雲

驚出谷

菅丞相

西樓月落花間曲

中殿燈殘竹裏音

宮鶯轉曉光
菅三品

あらたまの年たちかへるあしたより

待たるよものはうぐひすのこゑ (拾遺)

素性

あさみどり春たつそらにうぐひすの

はつこゑ待たぬ人はあらしな (榮花物語)

麗景殿女御

うぐひすのこゑなかりせば雪きえぬ

山ざといかではるを知らまし (拾遺)

中務

霞

霞光曙後殷於火

草色晴來嫩似煙

早春晴寄蘇州裏得
白居易易

鑽沙草只三分計

跨樹霞纒半段餘

春淺帶輕寒
菅丞相

きのふこそ年はくれしかはるがすみ

かすがの山にはや立ちにけり (萬葉)

人丸

春がすみたてるやいづこみよし野の

よし野のやまにゆきは降りつゝ (古今)

赤人

あさ日さすみねのしら雪むらぎえて

春のかすみはたなびきにけり (家集)

兼盛

雨

或垂花下潛増墨子之悲

時舞鬢間暗動潘郎

之思

長樂鐘聲花外盡

龍池柳色雨中深

密雨散如糸序
關下贈閻舍人
李嬌

墨子之悲一墨翟
嘗て練絲を見て
以て黄にすべ
く以て黒くすべ
しと歎ず是は
雨を絲に譬ふ
潘郎一晉の潘岳
は美男子也嘗
て二毛を歎ず
これに雨を白髮
に喩ふ
長樂一秦樑陽故

宮也 厭公作之
龍池 興慶宮に
在り、明皇遊ぶ

養得 自爲 二花 父母 一。
洗來 寧 辨 二藥 君 臣 一。
花新開 日初陽 潤。
鳥老 歸 時 薄 暮 陰。
斜脚 暖 風 先 扇 處。
暗聲 朝 日 未 晴 程。
さくらがり雨は降りきぬおなじくは
濡るとも花のかけにかくれん (拾遺)

仙家春雨 紀 納 言
春色雨中深 菅 三 品
微雨自東來 保 胤

ぬける 一 貫ける

梅 附紅梅

あをやぎの枝にかよれるはるさめは
いとめてぬけるたまかとぞ見る (新勅撰)

伊 勢

臘雪 一 臘は十二
月也

白片 落 梅 浮 二澗 水 一。
黄梢 新 柳 出 二城 牆 一。
梅花 帶 雪 飛 二琴 上 一。
柳色 和 煙 入 二酒 中 一。
漸 薰 臘 雪 新 封 裏。
偷 綻 春 風 未 扇 先。

春至 二香山 寺 一 白 居 易
早春初晴野宴 章 孝 標
寒梅結 二早花 一 村 上 御 製

陶門 柳 陶淵明
宅邊に五柳樹あ
り、自ら五柳先
生と稱す
庾嶺 一 大庾嶺と
て梅に名有り
五嶺 一 大庾始安
臨賀桂陽楊陽の
五嶺也

青絲 繰 出 陶 門 柳 一。
白玉 裝 成 庾 嶺 梅 一。
五嶺 蒼 々 雲 往 來 一。
但 憐 大 庾 萬 株 梅 一。
誰 言 春 色 從 東 到 一。
露 暖 南 枝 花 始 開 一。
いにしとし根こじてうゑし我宿の

尋 二春花 一 後 江 相 公
同 題 菅 文 時
同 菅 三 品

わか木のうめは花さきにけり (拾遺)

安倍廣庭

わがせこに見せんと思ひし梅のはな

それとも見えすゆきの降れよば (萬葉)

赤 人

香をとめてたれ折らざらん梅のはな

あやなしかすみたちなかくしそ (拾遺)

躬 恒

紅 梅

梅 含 二鷄 舌 一 兼 二紅 氣 一。
江 弄 二瓊 花 一 帶 二碧 文 一。

早春尋 二李 校 書 一 積

あやなし 一 かく
したとて 香が
らはれて 何の
にも 立たねば 役

鷄舌 一 香の名

仙方—仙人の處

淺紅鮮娟。仙方之雪。媿色濃香芬郁。妓爐之煙。

讓薰

繞鴛梅正開詩

有_レ色易_レ分殘雪底。

無情難_レ辨夕陽中。

賦庭前紅梅

仙白風生空簸雪。

野爐火暖未_レ揚煙。

紅白梅花

君ならでたれに見せんうめのはな

いろをも香をも知る人ぞしる (古今)

友則

色かをばおもひもいれずうめのはな

つねならぬ世によそへてぞ見る (新古今)

花山院

柳

林鶯何處吟_二箏柱_一

墻柳誰家曝_二麴塵_一

天宮閣早春

漸欲拂_二他騎馬客_一

未_三多遮_二得_一上樓人

喜小樓西新柳抽_レ條

巫女廟—赤帝の
南に葬れる所
昭君村—王昭君
の生地

巫女廟花紅似_レ粉。昭君村柳翠_二於眉_一

題_二峽中石上_一
與_レ前一首絕句也
同

誠知_二老去風情少_一。見_レ此爭無_二一句詩_一

內宴序停_レ盃看_二柳色_一
紀_二納言_一
早春作

豈_レ趣_二紅艷_一

大庾嶺之梅早落。誰問_二粉粧_一。匡廬山之杏未_レ開。

早春作

雲擊_二紅鏡_一扶桑日。

春嫺_二黃珠_一嫩柳風。

柳影繁初合詩

嵇宅迎_レ晴庭月暗。

陸池逐_レ日水煙深。

後中書王

潭心月泛_レ交枝桂。

岸口風來_レ混葉蘋。

垂柳拂_二綠水_一詩

あをやぎのいとよしかくる春しもぞ

みだれて花はほころびにける (古今)

貫之

春くればしだれやなぎにまよふ絲の

いもがこころによりにけるかな

あをやぎの眉にこもれるいとなれば

嵇宅—晉の嵇康
の宅
陸池—南齊の陸
雲曉の池

くる一来る、緑

はるのくるにぞいろまさりける (新千載)

兼 輔

花 附落花

花明^{はな}上^{あきら}苑^か輕^{かろ}軒^の馳^は九^こ陌^の之^の塵^{ちり} 猿^{さる}叫^を空^{くう}山^{さん}斜^{しや}月^{げつ}瑩^み

千^{せん}巖^{がん}之^の路^{みち}

閑 賦 張 讀

上苑一上林苑也、始皇之を開き漢武之を重修す 輕軒一輕きくる

池^{いけ}色^{いろ}溶^と々^々藍^あ染^ざ水^{みづ} 花^{はな}光^{ひかり}焰^{えん}々^々火^ひ燒^や春^{はる}

早春招^{さう}張^{ちやう}賓^{ひん}客^{かく} 白

遙^{はるか}見^み人^{ひと}家^か花^{はな}便^{べん}入^に 不^ず論^{ろん}三^{さん}貴^き賤^{せん}與^と親^{しん}疎^そ

尋^ひ春^{はる}題^{だい}諸^{しよ}家^か園^{えん}林^{りん} 同

瑩^み日^ひ瑩^み風^{かぜ}高^{かう}低^{てい}千^{せん}顆^{くわ}萬^{まん}顆^{くわ}之^の玉^{たま} 染^{そめ}枝^{えだ}染^そ浪^{なみ}表^{へう}裏^り

一^{いち}入^に再^{さい}入^に之^の紅^{こう}

花^{はな}光^{ひかり}水^{みづ}上^{うへ}浮^う序^{じゆ} 菅^{かや}三^{さん}品^{ひん}

一入再入一幾度もくりかへし染めたる

誰^{たれ}謂^い水^{みづ}無^な心^{こころ}濃^の艶^{えん}臨^{りん}兮^や波^{なみ}變^{へん}色^{いろ} 誰^{たれ}謂^い花^{はな}不^ず語^{ものい}輕^{けい}漾^{やう}

激^{げき}兮^や影^{かげ}動^{うご}唇^{くちびる}

同 上 同

欲^{ほつ}謂^す之^の水^{みづ}則^{すなは}漢^{かん}女^{にょ}施^ほ粉^{こな}之^の鏡^{かみ}清^{せい}瑩^{けい} 欲^{ほつ}謂^す之^の花^{はな}

蜀人云々一白氏六帖に「蜀成都有濯錦之江」所謂蜀江の錦はこれに基く

亦蜀人濯文之錦燦爛

織^お自^の何^の絲^{いと}唯^{ただ}暮^{ゆふ}雨^{あめ} 裁^{たつ}無^な定^{ぢやう}樣^{やう}任^{まか}二^に春^{はる}風^{かぜ}

同 題 序 順

花^{はな}飛^と如^{ごと}錦^{にしき}幾^{いく}濃^の粧^ま 織^お者^{もの}春^{はる}風^{かぜ}未^{いま}疊^た箱^{ばな}

花^{はな}開^{ひら}如^{ごと}散^{さん}錦^{にしき} 菅^{かや}三^{さん}品^{ひん}

始^{はじめ}識^し春^{はる}風^{かぜ}機^{はた}上^{うへ}巧^{たくま} 非^{あら}唯^{ただ}織^お色^{いろ}織^お二^に芬^{ふん}芳^{ほう}

同 題 源 英 明

眼^{まなこ}貧^{ひん}蜀^{しよく}郡^{ぐん}裁^{さい}殘^{ざん}錦^{にしき} 耳^{みみ}倦^う秦^{しん}城^{じやう}調^{てう}盡^{じん}箏^{そう}

花^{はな}少^{せう}鶯^{おう}稀^ひ 同 源 相 規

世の中にたえてさくらのなかりせば

春のころはのどけからまし (古今)

業 平

わがやどのはな見がてらにくる人は

散りなんのちぞこひしかるべき (同)

躬 恆

見てのみや人にかたらんやまざくら

手ごとに折りていへづとにせん (同)

素 性

落花

落花不語空辭樹

流水無心自入池

朝踏落花相伴出

夕隨飛鳥一時歸

春花面々闌入酣暢之筵

曉鶯聲々豫參講誦

之座

落花狼藉風狂後

啼鳥龍鐘雨打時

離閣鳳翅憑檻舞

下樓娃袖顧階翻

さくら散るこのした風はさむからで

そらに知られぬ雪ぞふりける (拾遺)

とのもりのとものみやつこ心あらば

この春ばかりあさぎよめすな (同)

過三元家履信宅

白

春水頻與李二賓客廊外同遊因贈長句

同

春日侍前鑑西部督大王讀史記序後江相公

惜殘春

同

落花還繞樹詩

菅三品

貫之

公忠

躑躅

晚葉尙開紅躑躅

秋房初結白芙蓉

夜遊人欲尋來把

寒食家應折得驚

思ひいづるときはの山のいはつよじ

いはねばこそあれ戀しきものを (古今)

題三元十八溪居

白

山石榴艶似火

源順

平貞文

欸冬

點著雌黃一天有意

欸冬誤綻暮春風

書窓有卷相收拾

詔紙無文未奉行

かはづ鳴くかみなびがはに影みえて

いまや咲くらん山ぶきのはな (新古今)

題花黃

保胤

清慎公

胤胤

厚見王

寒食一冬節を去る百五日疾風甚雨あるを云ふ、此時火を禁ず、ときはの山一時を掛く、山は山城太秦の北に在り

詔紙一麻を以て製し其色黃也

わがやどのやへの山吹ひとへだに

散りのこらなん春のかたみに (拾遺)

兼盛

藤

關々一鳥聲相和
する也

悵望慈恩三月盡 紫藤花落鳥關々

酬元十八三月三日慈恩寺
見寄 白

紫藤露底殘花色 翠竹煙中暮鳥聲

四月有餘春詩
源相規

たこのうら一越
中

たこのうらのそこさへにほふ藤波を

かざして行かん見ぬひとのため (拾遺)

繩丸

ときはなる松の名だてにあやなくも

かよれる藤の咲きてちるかな (續古今)

貫之

夏

名だてに一浮名
を立つるものと
なりて

更衣

經宿一一夜を
過したる
生衣一生絹にて
作りたる夏の衣
宿釀一年越しの
酒、昨秋より釀
し置ける酒の今
春に至りて熟せ
るもの

背壁燈殘二經宿 開箱衣帶二隔年香
生衣欲待一家 宿釀當招二邑老一酣

花の色にそめしたもとの惜しければ
ころもかへ憂きけふにもあるかな (拾遺)

早夏曉興 白
讚州作 菅
重之

首夏

竹葉一酒の異名
小蓋一小さきき
ぬがさ、初夏の
小さき荷葉の形
容

瓊頭竹葉經春熟 階庭薔薇入夏開
苔生石面一輕衣短 荷出二池心一小蓋疎

わがやどのかきねや春をへだつらん
なつ來にけりと見ゆる卯のはな (拾遺)

薔薇正開春酒初熟 白
首夏作 物部安興
順

夏の夜

平沙一ひろく
としたる河邊の
砂原

風吹二枯木一晴天雨

月照二平沙一夏夜霜

江樓夕望

白

風生レ竹夜窓間臥

月照レ松時臺上行

早夏獨居

同

空夜窓閑螢度後

深更軒白月明初

夜陰歸レ房

紀

納言

夏の夜をねぬに明けぬといひおきし

人はものをやおもはざりけん

人

丸

ほととぎす鳴くやさつきの短夜も

ひとりしぬればあかしかねつも (拾遺)

同

夏の夜はふすかとすれどほととぎす

鳴くひとこゑにあくるしのよめ (古今)

貫

之

端午

ねぬに明けぬ
夏の夜はまだね
ぬ内に明けたり
誠に短し
ほととぎす一
この歌萬葉には二
句「きなくさつ
きの」に作り、拾
遺と共に詠者不
詳とせり

ありてはさきあたつてにあやふうしてみそたてり

無レ意故園任レ脚行

懸二艾人一菅

わかごまとけふにあひくるあやめ草

おひおくるよやまくるなるらん (歌仙家集)

頼

基

きのふまでよそに思ひしあやめぐさ

けふわがやどのつまと見るかな (拾遺)

能

宣

納涼

青苔地上消二残雨一

緑樹陰前逐二晚涼一

池上逐レ涼

露簟清瑩迎レ夜滑

風襟蕭灑先レ秋涼

池上夜境

不三是禪房無二熱到一

但能心靜即身涼

恒寂禪師

班婕妤好團雪之扇

代二岸風一兮長忘

同

涼之珠當二沙月一兮自得

燕昭王招

避レ暑對二水石一序

匡衡

艾人一草にて
作りたる人形
五月五日毒氣を
禳ふ爲めとて戸
上に懸く
無レ意云々一戸
に懸けらるる其
位置は危ふげな
れど衣冠を帯し
たる我様の麗し
さに敢てもと生
へ居りし庭園を
戀しとも思はず
つま一端也、誓
のつまに妻を掛
く
殘雨一原詩「殘
暑」に作る
露簟一簟は竹筵
也
班婕妤一班況の
女たり、成帝の宮
人たり、婕妤は
官名也、其怨歌
行に團扇を歌へ
る最も有名也
招涼之珠一王之
を懐にして涼を
納るといふ玉

新圖臨水障
新圖臨水障
に水邊の景色を
畫ける障子

臥見新圖臨水障
行吟古集納涼詩

題納涼之畫
菅

池冷水無三伏夏
松高風有二聲秋

夏日閑避暑
源英明

すどしやと草むらぶとにたち寄れば

あつさぞまさるとこなつのはな (古今六帖)

貫之

したくどる水にあきこそかよふらし

むすぶいづみの手さへすどしき (新千載)

中務

松かけには井の水をむすびあけて

なつなき年とおもひけるかな (拾遺)

惠慶法師

いは井岩井
石疊みの井戸

晩夏

竹亭陰合偏宜夏
水檻風涼不待秋

夏日遊永安水亭
白

夏はつるあふぎと秋のしらつゆと

いづれかさきにおきまさるらん

中務

ねぎごとともきかずあらぶる神だにも

けふはなごしのはらへなりけり

齋宮

なごしのはらへ
六月晦日の大
祓

花橘

盧橘子低山雨重
栴檀葉戰水風涼

西湖晚歸望孤山寺
白

枝繫金鈴春雨後
花薰紫麝飄風程

花橘詩
後中書王

さつき待つ花たちばなの香をかけば

むかしの人のそでの香ぞする (古今)

伊勢

ほとよぎす花たちばなの香をとめて

啼くはむかしのひとや戀しき (新古今)

貫之

蓮

さつき待つ此
歌古今集によみ
人しらずとせり

盧橘—夏蜜柑
颯風—南風

風荷一風にまびく連
御一階段
翠扇一運の葉の
開ける形容

吳山曲一流水大
巨南無佛と稱し
て吳山の池の青
蓮華を採り得し
故事
佛爲眼一佛眼
を青蓮華に譬ふ

山鳥一はとぎす
さつき聞一萬葉
「この夜ちのあ
ほつかなきに時
鳥鳴くなる聲の
もとのほるけ
さ」の改作

風荷老葉蕭條緑
水蓼殘花寂寞紅
葉展影翻當砌月
花開香散入簾風
煙開翠扇清風曉
水泛紅衣白露秋
岸竹枝低應鳥宿
潭荷葉動是魚遊
緣何更覓吳山曲
便是吾君座下花
經爲題目佛爲眼
知汝花中植善根
はちす葉のにごりにしまぬ心もて

なにかは露をたまとあざむく (古今)

郭公

一聲山鳥曙雲外
萬點水螢秋草中
さつき聞おほつかなきにほとよぎす

鳴くなるこゑのいとどはるけき

縣西郊秋寄贈馬造階下
階下蓮白
題雲陽驛亭蓮
池亭晚望
延喜御製
石山寺池蓮源爲憲

明日香皇子

ひとづてにこそ
一夜半郭公啼け
りと人より傳へ
ぎきに

屋上江泌夜讀
書するに月光に
隨ひて巻を握り
て屋に昇りし故
事
床頭一孫康雪に
映じて讀書せる
故事
山經一山海經の
海賦一木華の作
くさふかき一新
勅撰集にはよみ
人しらず

ゆきやらで山路くらしつほとよぎす

いまひとこゑの聞かまほしさに (拾遺)

さよふけて寝ざめざりせば郭公

ひとづてにこそ聞くべかりけれ (同)

螢

螢火亂飛秋已近
辰星早沒夜初長
兼葭水晴螢知夜
楊柳風高鴈送秋
明々仍在誰追
片於床頭

山經卷裏疑過岫
海賦篇中似宿流
くさふかきあれたる宿のともしびの

公忠

夜坐元棋

常州留與楊給事

秋螢明賦

同橋直幹

おもひし思ひに
火言ひ掛く

扇々一風のそよ
吹く形容

千峯鳥路一鳥な
らては至り難き
程の連山の高所
麥秋一四月
秦苑靜一原詩
「秦苑夕」に作る

かぜにきえぬはほたるなりけり (新勅撰)
つよめどもかくれぬものはなつ蟲の
身よりあまれるおもひなりけり (後撰)

蟬

遅々兮春日玉甃暖兮温泉溢 扇々兮秋風山蟬

鳴兮宮樹紅

千峯鳥路含梅雨 五月蟬聲送麥秋

鳥下二綠蕪秦苑靜 蟬鳴二黃葉一漢宮秋

今年異例腸先斷 不二是蟬悲容意悲

歲去歲來聽不變 莫言秋後遂爲空

なつ山のみねのこさるのたかければ

驪山宮賦

白

發青滋店至長安西方
渡江之作

李嘉祐

題咸陽城東樓

許渾

聞新蟬

管

吟初蟬

紀納言

人丸

重光

これを見よ人もとがめぬこひすとて

ねをなく蟲のなれるすがたを (後撰)

扇

盛夏不消雪終年無盡風 引秋生手裏藏月

入懷中

不期夜漏初分後 唯翫秋風未到前

あまの川かは瀬すゞしきたなばたに

あふぎの風をなほやかさまし (拾遺)

あまの川扇のかぜにきりはれて

空すみわたるかさよぎのはし

白羽扇

白

輕扇動明月
管三品

中務

元輔

月一扇の形を喻

夜漏初分一日暮
れて夜の初更に
いること

かさまし一手向
けん、たなはた
に手向くるをか
すといひ習へり

きみが手に此
歌四句或は「な
びかぬ草は」を
びかぬ色も」に
作る

きみが手にまかする秋のかげなれば

なびかぬ草もあらじとぞおもふ (家集)

中務

秋

立秋

蕭颯涼風與二衰鬢

誰教二計會一時秋

立秋日登二樂遊園

白

鷄漸散間秋色少

鯉常趨處晚聲微

於宮師匠舊亭賦二葉落
庭時詩
保胤

秋來ぬと目にはさやかに見えねども

かぜの音にぞおどろかれぬる (古今)

敏行

うちつけにものぞ悲しきこの葉ちる

秋のはじめをけふとおもへば (後撰)

能宣

鯉常趨處一師文
時より教訓を受
けし舊亭の義
論語季氏篇に出
てたる一季趨而
過庭孔子に教
を受けし故事に
よる
晩聲一夕方木の
葉の散る聲

早秋

二毛一毛髪の黒
白半するを云ふ

但喜下暑隨二三伏

不知秋送二一毛一來

早秋答二蘇六一

白

槐花雨潤新秋地

桐葉風涼欲二一夜天

早秋同

炎景剩殘衣尙重

晚涼潛到簞先知

立秋後作
紀家

秋たちていくかもあらねどこのねぬる

あさけの風はたもとすどしも (拾遺)

安貴王

七夕

乞巧一文章女藝
の巧ならんを二
星に乞ふ也

憶得少年長乞巧

竹竿頭上願絲多

七夕

白

二星適逢未叙別緒

依々之恨一五夜將明頻驚

涼風颯々之聲

代二牛女借殘更詩序
美材

秋たちて一萬葉
に出で二句「い
くかもあらね
ば」五句袂さぶ
しも

乞巧一文章女藝
の巧ならんを二
星に乞ふ也
願絲一三星に願
をかけて竹竿に
飾る五色の絲
と五夜一五更のこ

珠—涙の玉、鮫人の涙が珠玉たりし故事
怨—或は恨に作る
去衣—織女の歸り去る時の衣行燭—道行くに携ふるともし火

露應^{つゆはべし}別^{わか}涙^の珠^{たま}空^{なる}落^{たま}。
雲^{くも}是^{これ}殘^の粧^{よそ}髻^も未^{まだ}成^{なら}。
風^{かぜ}從^{より}昨^{きのう}夜^の聲^{こゑ}彌^{いよ}彌^{いよ}怨^{うらむ}。
露^{つゆ}及^{およ}明^あ朝^あ涙^{なみだ}不^た禁^げ。
去^き衣^い曳^ひ浪^{なみ}霞^{かすみ}應^{おこ}濕^し。
行^{かう}燭^{しよく}浸^{ひた}流^{なが}月^{つき}欲^{ほつ}消^す。
詞^{こと}託^{たく}微^は波^{なみ}雖^い且^も遣^{やる}。
意^{こころ}期^は片^{ひと}月^{つき}欲^{ほつ}爲^な媒^な。

代^二牛^一女^一惜^二曉^一更^一。
代^二牛^一女^一惜^二曉^一更^一。
後^二江^一相^二公^一。
七^夕會^二媚^一渡^二河^一橋^三詩^一。
菅^二三^一品^一。
代^二牛^一女^一待^二夜^一。
菅^二輔^一昭^一。

あまの川とほきわたりにあらねども
きみのふなではとしにこそまで (後撰)
ひとよせに一夜とおもへどたなばたの
あひ見る秋のかぎりなきかな (拾遺)
としごとにあふとはすれどたなばたの
ぬる夜のかすぞすくなかりける (古今)

秋興

人丸
貫之
躬恒

楚思—楚囚の思、故郷を思ふ情の切なること
商聲—秋聲

蜀茶—蜀州の茶名有り
楚練—楚國の練絹
いはれの—盤余野は大和なり
たなならね—通りにあらず、最も寂し

林^{りん}間^{かん}煖^{あたた}酒^{さけ}燒^{たき}紅^{こう}葉^え。
石^{せき}上^{じやう}題^{だい}詩^し拂^{はら}綠^{りよく}苔^{たい}。
楚^そ思^し森^{せい}茫^{ぼう}雲^{うん}水^{すい}冷^{れい}。
商^{しやう}聲^{せい}清^{せい}脆^{せい}管^{くわん}絃^{けん}秋^{あき}。
大^{おほ}底^ぢ四^し時^じ心^{こころ}惣^{すべ}苦^く。
就^つ中^{ちゆう}腸^{ちやう}斷^た是^{こゝ}秋^{あき}天^{てん}。
物^{ぶつ}色^{しよく}自^{おの}堪^の傷^{いた}客^{きやく}意^い。
宜^ひ將^{なる}愁^な字^じ作^な秋^{あき}心^{こころ}。
由^も來^{より}感^{かん}思^し在^あ秋^{あき}天^{てん}。
多^{おほ}被^は當^{たり}時^{とき}節^{せつ}物^{ぶつ}牽^ひ。
第^{だい}一^{いち}傷^{いた}心^{こころ}何^{なに}處^{ところ}最^{なほ}。
竹^{ちやく}風^{ふう}鳴^な葉^え月^{つき}明^あ前^{まへ}。
蜀^{しよく}茶^{ちや}漸^{ぜん}忘^{わす}浮^う花^{はな}味^{あじ}。
楚^そ練^{れん}新^{あらた}傳^た擣^た雪^{ゆき}聲^{こゑ}。
うづら鳴くいはれの野邊のあき萩を
おもふ人とも見つるけふかな
あきはなほ夕まぐれこそたどならね
をぎのうはかせ萩のしたつゆ (藤原義孝集)

題^二仙^一遊^二寺^一。
於^二黃^一鶴^二樓^一宴^二罷^一望^一。
暮^二立^一。
客^二舍^一秋^二情^一。
野^二相^一公^一。
秋^二日^一感^二懷^一。
田^二達^一音^一。
暑^二往^一寒^二來^一詩^一。
江^二相^一公^一。
義^二孝^一少^二將^一。

秋晩

松臺—松樹のほとりの臺樹か

相思夕上二松臺立

葢思蟬聲滿耳秋

題李十一東亭

法輪寺口號

望山幽月猶藏影

听砌飛泉轉倍聲

菅三品

をぐら山—新古今に上み人不知とす
はのか—穂、仄か

をぐら山ふもとの野べのはなすよき

ほのかに見ゆるあきのゆふぐれ (新古今)

貫之

秋夜

秋夜長夜無眠天不明

秋々殘燭背壁影

上陽白髮人

白

遲々鐘漏初長夜

秋々星河欲曙天

長恨歌

燕子樓中霜月夜

秋來只爲一人長

燕子樓

同

燕子樓—妾宅也唐張建封、明々

蔓草露深人定後
終宵雲盡月明前
兼葭洲裏孤舟夢
榆柳營頭萬里心
あしびきのやまどりの尾のしだりをの
ながくし夜をひとりかもねん (拾遺)
むつごとのまだつきななくに明けにけり
いづらは秋のながしてふ夜は (古今)

秋夜詣祖廟詩

野相公

秋夜雨

齋名

人丸

躬恒

八月十五夜 附月

秦旬之一千餘里凜々氷鋪漢家之三十六宮

長安八月十五夜賦

公乘億

澄々粉飴

織錦機中已辨相思之字

擣衣砧上俄添

怨別之聲

同

相思之字—晉の寶滔の妻蘇氏夫を思ひ廻文の詩を錦に織り込みし故事を指す

故人—舊友
嵩山—五岳の一
兩顆珠—空と水
と二つの月
十二廻—一年十
二ヶ月

瑤池—西王母が
仙宮の池をいふ
金膏—水銀
楊貴妃—唐玄宗
之を寵す
李夫人—漢武帝
之を愛す

三五夜中新月色。二千里外故人心。
嵩山表裏千重雪。洛水高低兩顆珠。
十二廻中無勝於此夕之好。千萬里外各爭二
於吾家之光。

碧浪金波三五初。秋風計會似空虛。

自疑荷葉凝霜早。人道蘆花過雨餘。

岸白還迷松上鶴。潭融可算藻中魚。

瑤池便是尋常號。此夜清明玉不如。

金膏一滴秋風露。玉匣三更冷漢雲。

楊貴妃歸唐帝思。李夫人去漢皇情。

水のおもにてる月なみをかぞふれば

こよひぞ秋のもなかなりける (拾遺)

八月十五日夜禁中獨直對
月憶元九

八月十五日夜翫月
同

天高秋月明序
紀納言

月影滿秋池詩
淳茂

同

同

同

滿月明如鏡
菅三品

對雨戀月
源順

順

月

戎—或は戎に作
る、從ふべし

合浦—縣名也、
貪吏のために疲
弊し珠玉他境に
去るといふ
豐嶺鐘聲—豐山
に九鐘あり
華亭鶴—丁令威
道を學んで後鶴
に化し華表に居
りし故事をいふ

誰人隴外久征戎。何處庭前新別離。

秋水漲來船去速。夜雲收盡月行遲。

不醉黔中爭去得。磨圍山月正蒼々。

天山不辨何年雪。合浦應迷舊日珠。

欲和豐嶺鐘聲否。其奈華亭鶴警何。

鄉淚數行征戍客。棹歌一曲釣漁翁。

あまの原ふりさけ見ればかすがなる

みかさのやまに出でしつきかも (古今)

しら雲にはねうちかはし飛ぶかりの

かすさへ見ゆるあきの夜のつき (同)

秋月

汴水東歸卽事
鄧展

送蕭處士遊黔南
白

禁庭翫月
三統理平

夜月似秋霜
前中書王

山川千里月
保胤

安倍仲麿

躬恒

世にふればもの思ふとしもなければども

月にいくたびながめしつらん (拾遺)

後中書王

九日 附菊

燕知社日辭巢去。菊爲重陽冒雨開。

秋日東郊作 皇甫冉

探故事於漢武則赤莢插宮人之衣。尋舊跡於

魏文亦黃花助彭祖之術。

視賜祥臣菊花詩序 紀納言

先二三遲兮吹其花如曉星之轉河漢。引二十分兮

蕩其彩疑三秋雲之迴洛川。

同 同

谷水洗花。汲下流而得上壽者三十餘家。地

脈和味。喰日精駐二年顏者五百箇歲。

同 同

わがやどの菊のしらつゆけふごとくに

いく代つもりてふちとなるらん (拾遺)

中務

菊

一半黃一黃菊半分開きたり

霜蓬老鬢三分白。露菊新花一半黃。

九月八日酬皇甫十見贈 十日菊花 元稹

不二是花中偏愛菊。

此花開後更無花。

翫禁庭殘菊 紀納言

嵐陰欲暮契松柏之後凋。秋景早移嘲芝蘭之

先敗。

菊散一叢金 三善清行

鄴縣村閭皆潤屋。

陶家兒子不垂堂。

菊是草中仙 保胤

蘭苑自慙爲俗骨。

謹籬不信有長生。

花寒菊點叢 菅三品

蘭蕙苑嵐摧紫後。

蓬萊洞月照霜中。

ひさかたの雲のうへにて見るきくは

あまつ星とぞあやまたれける (古今)

敏行

陶家陶淵明 不垂堂一文選 家累千金一坐 不垂堂家のは 近かに出でず 紫蘭蕙の花は 何れも紫なり

おきまどはせる
かど人をまどは
かす

峻函一勝重なる
關所の名
蕭瑟一秋風の寂
しき状也
孟貫一古の勇士
頭目云々一頭目
はやりても今日
一日の秋はやら
れぬ
文峯、詞海一作
文作詩などする
場所

もとゆひ一髻
也、頭髮の意

こころあてに折らばやをらん初霜の

おきまどはせるしら菊のはな (古今)

九月盡

縦以二峭函一爲レ固。難レ留二蕭瑟於雲衢。縦令二孟賁一

而追。何遮二爽籟於風境。

頭目縦隨二禪客乞。以秋施與太應レ難。

文峯按レ轡白駒景。詞海艤レ舟紅葉聲。

やまさびし秋もくれぬとつぐるかも

まきの葉ごとにおけるあさしも

くれて行く秋のかたみにおくものは

わがもとゆひの霜にぞありける

躬恒

山寺惜秋序

山寺九月盡

秋未出二詩境一

以二言

千里

兼盛

俗「しよく」の
訓各種の本概ね
皆如此

一時情一
一時の
興に任せての
意原詩「枝情」
に作る
あきの野に拾
遺集かの岡に
なはをなみ一繩
の無くて也

女郎花

はなのいろはこしむせるあはの
花色如二蒸粟一。俗呼爲二女郎一。聞レ名戲欲レ契二偕老一。

恐二惡二衰翁首似二霜一。

をみなへしおほかる野邊にやどりせば

あやなくあだの名をやたとまし (古今)

をみなへし見るに心はなぐさまで

いとどむかしの秋ぞこひしき (新古今)

萩

あかつきのつゆにしかないてはなはじめてひらく
曉露鹿鳴花始發。百般攀折一時情。

あきの野に萩かるをのこなはをなみ

詠二女郎花一

美材

清慎公

新撰萬葉集詩

ねるやねりそのくだけでぞおもふ (拾遺)

人丸

うつろはんことだにをしきあき萩を

伊勢

折れるばかりにおけるつゆかな (同)

秋の野のはぎのにしきをわがやどに

元輔

蘭

鹿のねながらうつつしてしがな (歌仙家集)

杪秋獨夜

前頭一我が前の
あたり

扶桑豈無影乎 浮雲掩而忽昏 叢蘭豈不芳乎

菟裘賦

前中書王

凝如漢女顏施粉 滴似鮫人眼泣珠

紅蘭受露

都良香

曲驚楚客秋絃馥 夢斷燕姬曉枕薰

蘭氣入輕風

直幹

鹿のねながら
鹿の鳴き居る聲
もそつくり

蕪姬一鄭文公の
妾蕪姑をいふ

香はにはひつゝ
古今集「香こ
そにはへれ」

ぬし知らぬ香はにはひつゝ秋の野に
たがぬぎかけしふぢばかまぞも (古今)

素性

槿

松樹千年終是朽 槿花一日自爲榮

放言詩

白

來而不留 薤藪有二拂晨之露 去而不返 槿籬無二

願文

前中書王

おほつかなたれとか知らん秋ぎりの

たえまに見ゆるあさがほのはな (新勅撰)

道信中將

あさがほをなに果敢なしと思ひけん

人をもはなはさこそ見るらめ (拾遺)

同

前栽

薤一にら、白氏
の句に「薤葉有
朝露」槿枝無宿
花ことあり、送葬
の歌を薤露歌と
いへり、人生の
果敢なき喩に用
ふ

元亮—陶淵明の別字

はなにより—此歌作者出典凡て未詳

綴綴—鹿子染のこと、原詩「來綴」に作る

多見二栽花悦目儔先時豫養待開遊
自吾閑寂家僮倦春樹春栽秋草秋
閑思看汝汝花紅日正是當吾鬢白年
會非三種處思二元亮爲是花時供二世尊
塵をだにするじとぞ思ふ咲きしより

いもとわがぬるとこなつのはな (古今)

はなによりものをぞおもふしら露の

おくにもいかどあらんとすらん

紅葉 附落葉

不堪紅葉青苔地 又是涼風暮雨天
黃纈纈林寒有葉 碧瑠璃水淨無風

秋雨 中贈二元九
白
泛太湖書寄微之 同

栽秋花 菅三品

同

初植花樹詩

保胤

栽三種菊

菅三品

躬恒

贅疎—一に贅餘に作る

もる山—漏るに近江の守山を掛く

さほ山—大和佐保山
きりたぬ—霧起たぬに切り裁たぬを掛く

宮漏—宮中の漏刻
空階—人影も無く寂しき階

搖落—葉の秋風にゆり落さるること

洞中清淺瑠璃水 庭上蕭疎錦繡林
外物獨醒松澗色 餘波合力錦江聲

斷池頭紅葉 山水唯紅葉 胤
保以言

むら／＼のにしきとぞ見るさほ山の
した葉のこらずもみぢしにけり (歌仙家集)

はよそのもみぢきりたぬまは

清正

落葉

三秋而宮漏正長 空階雨滴 萬里而鄉園何在

落葉窓深

愁賦 張讀

秋庭不拂携二藤杖 閑踏二梧桐黃葉一行

城柳宮槐漫搖落 秋悲不到貴人心

晚秋閑居 白
早入皇城贈王留守僕射 同

其故事を引く
風櫓一雁の聲を
嘯ふ
瀟湘一水洞庭
に合流す

歸雁

たがたまづさをかけて來つらん (古今)

友則

山腰歸雁斜牽帶
水面新虹未展巾

春日閑居
都在中

春がすみたつを見すててゆくかりは

はななきさとに住みやならへる (古今)

伊勢

蟲

切々暗窓下
嚶々深草裏
秋天思婦心
雨

秋蟲

客裏得秋夜獨坐見贈

思婦、幽人一物
思ふ女、世をは
かなむ人

夜幽人耳

霜草欲枯蟲思苦
風枝未定鳥栖難

同

短脚一臥床の臺
脚の短きをいふ

床嫌短脚

壁底吟幽月色寒
壁厭空鼠孔

秋夜
野相公

山館雨時鳴自暗
野亭風處織猶寒

同題
順

叢邊怨遠風聞暗
壁底吟幽月色寒

いま來んとたれたのめけん秋のよを

あかしかねつよまつむしの鳴く

きりくすいたくな鳴きそ秋のよの

ながきうらみはわれぞまされる (古今)

素性

鹿

蒼苔路滑僧歸寺
紅葉聲乾鹿在林

暗遣食萍身色變
更隨加草德風一來

もみぢせぬときはの山にすむしかは

おのれ鳴きてやあきを知るらん (拾遺)

能宣

素性一古今集に
よれば忠房なり
又古今集第四句
「長き思ひは」

暗一いつしか
加草德風一論
語に「君子之德
風小人之德草草
上之風一必偃」
とあり

宿雲林寺
溫庭筠
觀鎮西府獻白鹿詩
紀納言

ゆふづく夜一枕

ゆふづく夜をぐらの山に鳴くしかの

こゑのうちにや秋をしるらん (古今)

貫之

露

可憐九月初三夜

露似眞珠月似弓

暮江吟 白居易

露滴蘭叢寒玉白

風衝松葉雅琴清

秋風颯然新 源英明

さを鹿のあさたつをのあきはぎに

たまと見るまでおけるしらつゆ (古今)

家持

霧

竹霧曉籠街嶺月

蘋風暗送過江春

庾樓曉望 白居易

雖愁三夕霧埋二人枕

猶愛三朝雲出馬鞍

山居秋晚 後江相公

たがための云々
誰に見せんと
ての錦なれば斯
くは霧立ちて紅
葉をかくし折角
見に来し我には
見せざるぞ

あき霧のふもとをこめてたちぬれば

そらにぞあきの山は見えける (拾遺)

深養父

たがためのにしきなればかあき霧の

さほの山べをたちかくすらん (古今)

友則

擣衣

八月九月正長夜

千聲萬聲無了時

聞三夜砧 白

誰家思婦秋擣帛

月苦風凄砧杵悲

同 同

北斗星前横旅鴈

南樓月下擣寒衣

同 劉元叔

擣處曉愁二閨月冷

裁將秋寄塞雲寒

風疎砧杵鳴 菅篤茂

裁出還迷二長短製

邊愁定不昔腰圍

擣衣詩 直 幹

風底香飛雙袖舉

月前杵怨兩眉低

同 後中書王

年々別思驚秋鴈ねんねくのわかれのおもひおそろくあきのかりに 夜々幽聲到曉よよのかすかなるこゑはいたるあかつきのにはごりに 鷄と

同

からごころもうつこゑ聞けば月きよみ
まだ寝ぬひとをそらにしるかな (新勅撰)

貫之

冬

初冬

三分減三分減一春夏秋冬 去りて冬のみ残るをいふ
かみな月かみな月一後撰 集にはよみ人不知とす

十月江南天氣好じふげつかうなんてんきよし 可憐冬景似春花べしあはれむむつうけいにてはるうるはしきこぞ
四時零落三分減しじれいらくしてさんぶんけんじ 萬物蹉跎過半凋ばんぶつさだましてくわはんしほあり
床上卷收青竹簟ゆかのうへにはまきまきせむせいのたかむしろ 篋中開出白綿衣はこのうちよりひらきいだすはくめんぬきぬ

早冬早冬 白白
初冬即事初冬即事 延喜御製
驚冬驚冬 菅三品

貫之

冬夜

雲外夜雲外夜一雲の上 雲外夜一雲の上
に高く聳ゆる山中に宿れる夜
年光年光一歳月の移り行く影

一盞寒燈雲外夜いつさんのかんとうんぐわいのよ 數盃温酎雪中春すはいのうんちゅうはせつちゅうのはる
年光自向二燈前ねんくわうおのづからむかつてにもしのまへにつき 容思唯從二枕上かくのおもひはたよりまくらのうへなる 一生一生

和季中承與季給事山居雪夜同宿小酌和季中承與季給事山居雪夜同宿小酌 冬夜獨起冬夜獨起 尊敬

おもひかねいもがりゆけば冬の夜の
かはかせさむみ千鳥なくなり (拾遺)

貫之

歲暮

老底老底一老後

寒流帶月澄如鏡かんりゅうおびてつきをすめるごもしかたのみ 夕吹和霜利似刀ゆふふのかぜくわしてしもにせきこころにたりかたなに
風雲易下向二人前ふううんはやすくむかつてひとのまへに 歲月難從二老底さいげつはがたしよりおいのそこかへり 還上還上

江樓宴別江樓宴別 白白
花下春花下春 良春道

ゆく年の惜しくもあるかなますかどみ
見るかけさへにくれぬとおもへば (古今)

貫之

爐火

黃醅綠醅一濁酒
と清酒
逐夜開一毎夜
客あるをいふ
臘裏一十二月の
中
終日一に「終
夜」に作る
他一或は「多」に
作る
獸炭一けもの
形に作れる炭

黄醅綠醅迎冬熟
絳帳紅爐逐夜開
看無野馬聽無鶯
臘裏風光被火迎
此火應鑽花樹取
對來終日有春情
他時縱醉鶯花下
近日那離獸炭邊
うづみ火の下にこがれしときよりも
かくにくまるよをりぞわびしき

業平

戲招諸客
白
火見臘夫春
菅三品
同
同
同
輔時

霜

花一蘆荻の花

三秋岸雪花初白
一夜林霜葉盡紅
萬物秋霜能壞色
四時冬日最凋年

般若寺別成公
温遊筠
歳晚旅望
白

閨寒夢驚或添孤婦之礎上
山深感動先

侵四皓之鬢邊

青女司霜賦
紀納言

君子夜深聲不警
老翁年晚鬢相驚

早霜
菅丞相

聲々已斷華亭鶴
歩々初驚葛履人

寒露凝霜
菅三品

晨積瓦溝鴛變色
夜零華表鶴吞聲

同前題
紀納言

夜を寒みねざめて聞けばをしぞなく

はらひもあへず霜やおくらん (拾遺)

雪

梁王之苑一梁孝
王之兔園

曉入二梁王之苑一雪滿二群山一
夜登二庾公之樓一
月明二

千里

白賦
謝
觀

銀河沙漲三千界
梅嶺花開一萬株

雪中即事
白

四皓一漢の時東
園公用里先生綺
里李夏黃公とて
四翁あり、商山
に隱る
君子一鶴をいふ
聲不警一鳴か
ず、菅家文章に
聲字「音」に作る
瓦溝一瓦屋根の
溝
鴛一鴛鴦の瓦

開一或は「排」に
作る

鶴髪一鶴の毛の
裘也

腋一腋毛、其白
きを雪の暎とせ
る也

夜琴聲一楚王臺
の上にて琴を弾
く、廻雪の曲と
いふ

ふる一降る、舊
る

雪似二鷺毛一飛散亂らんす 人被二鶴鬣一立徘徊ひさはきてくわくしやうをたつてはいくわいす

或逐レ風不レ返如レ振二群鶴之毛一あろひつはつてかぜをすかへらごしふるふがぐんくわくのけを 亦當レ晴猶殘またあつてははれにままのこれりうたがふ 疑レ

綴二衆狐之腋一つるかみしうこのわきを

翅似二得群栖浦鶴一つばさはにたりんでぐんをすむらにつるに 心應二乘レ興棹舟人こころはべしじようじてきようにきをさすふねにひとなる

立於二庭上頭爲レ鶴たつておいてはていじやうにかうべたりつる 坐在二爐邊一手不レ輟ざしてあははろへんにてずかざまら

班女閨中秋扇色はんごよがねのうちのあきのあふぎのいろ 楚王臺上夜琴聲そわうのうてはのうへのよるのきんのこゑ

みよし野の山にふりやしぬらん（拾遺）

ふるさと寒くなりまさるなり（古今）

ゆきふれば木ごとに花ぞ咲きにける

いづれをうめとわきて折らまし（同）

酬二令公雪中見贈
白

春雪賦 紀納言

池上初雪 村上御製

客舍對雪 菅

題雪 尊敬

景明

是則

友則

氷 附春氷

氷封二水面無レ浪こほりほうじてするめんになしなみ

霜妨二鶴唳一寒無レ露しもさまたけてくわくれいをかきうしてなしつゆ 水結二狐疑一薄有レ氷みづむすんでこぎをうすうしてありこほり

おほぞらの月のひかりのさむければ

かけみし水ぞまづこほりける（新撰萬葉）

七條后宮

春氷

氷消見二水多レ於レ地こほりきえてみればみつをおほくよりもち

雪霽望二山盡一入レ樓ゆきはれてのそめはやまをこせやくくいなるうに

雪盡梁王不レ召二枚一ゆきつきてりやうわうがめきまいを

やまかけのみぎはまされる春かぜに

早春憶遊二思黯南莊一

早春雪水消 白

雪消水亦解 相規

臘月獨興 菅

狐疑二水聞一波聲 相如

狐疑一狐は疑ひ
深く、氷の張る
を見ては氷下に
水聲なきを聞き
定めて始めて河
を渡るといふ
もほぞらの一此
歌古今集に讀人
不知とあり、二
三句「月の光し
清ければ」

霜一光武皇帝の
臣王霸水を瞻て
渡を察せし故事
枚一梁孝王枚乘
を召して雪を賞
せし故事
溥陀一河の名

谷のこほりはけふやとくらん(續後拾遺)

惟正

霰あられ

雪化爲霰
菅

麿しやう米のくよしねか
のを白をくひてて精
米に似たるより
いふ

麿牙米しやうがのよねをひて簸せ聲い々く脆もろし龍りやう領が珠のたまを投をうじて顆くわ々く寒さむし

みやまにはあられ降るらし外山なる
まさきのかづらいろつきにけり(古今)

貫之

佛名ぶつみやう

獻けん贈ぞう禮らい經きやう老らう僧そう

香かう自じ禪ぜん心しん一いつ原げん
句く香かう出しゅ善ぜん心しん
にに作さくるる

香かう火くわ一いち爐ろ燈とう一いつ盞さん白はく頭とう夜や禮らい佛ぶつ名みやう經きやう
香かう自じ禪ぜん心しん無む用よう火か花はな開ひら合あ掌てい不ふ因いん春はる
ああららたたままのの年ねんももくくるるれればばつつくくりりつつるる

罪ものこらすなりやしぬらん(家集)

兼盛

懺ぜん悔かい會かい作さく
菅かん丞しやう相さう

かぞふれば我身につもるとしつきを

おくりむかふとなにいそぐらん(拾遺)

同

年のうちにつくれる罪はかきくらし

ふるしら雪とともにきえなん(同)

貫之

かかききくくららしし空くう
かかきき曇どんりりて

和漢朗詠集 卷下

雜

風

春風暗剪庭前樹

夜雨偷穿石上苔

入松易亂欲

明君之魂 流水不歸 應送列

子之乘

漢主手中吹不駐

徐君塚上扇猶懸

班姬裁扇應誇尙

列子懸車不往還

あき風の吹くにつけてもとはぬかな

をぎの葉ならばおとはしてまし (後撰)

春日山居

昭

風中琴

紀納

言

北風利如劍

胤

清風何處隱

同

中

務

列子一名は御寇鄭人也、能く風に御して行くと云ふ
徐君一吳の李札劍を徐君の塚に懸けし故事
扇一風が樹を吹きあふるをいふ
保胤一前詩一行葛の作とす、従ふべきか

ほのくくとありあけの月の月かけに

もみぢ吹きおろす山おろしのかぜ (新古今)

雲

竹斑湘浦雲凝鼓瑟之蹤

鳳去秦臺月老吹

簫之地

山遠雲埋行客跡

松寒風破旅人夢

盡日望雲心不繫

有時見月夜方閑

漢皓避秦之朝望礙孤峯之月

陶朱辭越之暮

眼混五湖之煙

暫借崎嶇非戴石

空儉峻嶮豈生松

漢帝龍顏迷處所

淮王鷄翅失留連

愁賦張

讀

同齋

名

閨女幽栖

積

視雲知隱處

賦

夏雲多奇峯

言

秋天無片雲

以

言

中

竹斑湘浦一舜の二女舜の二妃を湘夫人と云ふ、舜崩ず、二妃の涙竹にかゝりて竹盡く斑なりと傳ふ
鳳去秦臺一秦史籛を吹く、秦穆公其女弄玉を妻はず、後弄玉は鳳に乗り籛史は龍に乗りて共に去る
漢皓一漢の四皓秦の亂を避けて商洛山に遁る
陶朱一越の臣范蠡越を去りて姓名を變へたる也
漢帝一高祖のこと
淮王一淮南王劉安

よそにのみ見てややみなんかつらぎや

たかまの山とみねのしらくも (新古今)

讀人しらす

晴

煙消二門外青山近。露重窓前綠竹低。

晴興 鄭師冉

紫蓋之嶺嵐疎雲收二七百里之外。瀑布之泉

波冷月澄二四十尺之餘

山晴秋望多序 惟

雲消二碧落一天膚解。風動二清漪二水面皺。

梅雨新霽 都良香 成

雙鶴出阜披霧舞。孤帆連水與雲消。

高天澄遠色 菅三品

歸嵩鶴舞日高見。飲渭龍昇雲不殘。

晴後山川清 以言

かすみはれみどりの空ものどけて

あるかなきかにあそぶいとゆふ

赤人

紫蓋—山の名

漪—さくなみ 歸嵩鶴—周靈王太子晉(王子喬といふ)嵩高山に上り鶴に乗りてあらはれし故事あり 渭—川の名 いとゆふ—遊絲 (カゲロフ)

曉

佳人盡飾二於晨粧。魏宮鐘動。遊子猶行二於殘

月函谷鷄鳴。

曉賦 賈島

幾行南去之雁。一片西傾之月。赴二征路二獨

行之子。旅店猶扃。泣二胡城二百戰之師。胡笳

未歇。

同 謝 觀

嚴粧金屋之中。青蛾正畫。罷二宴瓊筵之上。

紅燭空餘。

同 禁中夜作 白居易

五聲宮漏初明後。一點窓燈欲滅時。

同 禁中夜作 白居易

あかつきのなからましかば白露の

おきてわびしきわかれせましや (後撰)

貫之

遊子云々—賈の孟嘗君秦に客遊し編に秦を遁れ函谷關に至り從者に鷄聲をなさしめて國に歸りし故事をいふ 胡笳—笳は笛の類、胡人蘆葉を捲いて之を吹く 金屋—華麗なる舍 青蛾—美人の眉 五聲宮漏—五更を報ずる宮中の漏刻

松

嵇康一晉の人字は叔夜、人と爲り岳々として孤松の獨立せるが如し
養由一養由基は楚人也、柳葉を去る百歩にして百發百中す、即ち下句は柳の詠也
錯午一暑と涼と互に交錯するこ
十八公一吳の丁固松樹腹上に生ふと愛む、松字は十八公也、後十八歳公たらんと、果して愛の如し

但有雙松當砌下
更無一事到心中
青山有雪諳松性
碧落無雲稱鶴心
千丈凌雪應喻嵇康之姿
百步亂風誰破養由之射

新昌坊閑居
寄殷燒潘
許
柳化爲松賦
紀納言

九夏三伏之暑月竹含錯午之風
立冬素雪之

寒朝松彰君子之德

河原院賦
順

十八公榮霜後露
一千年色雪中深

歲寒知松貞
山居秋晚
同

含雨嶺松天更霽
燒秋林葉火還寒

後江相公

ときはなる松のみどりも春くれば

いまひとしほの色まさりけり (古今)

宗子

われみてもひさしくなりぬ住吉の

さしのひめ松いくよへぬらん (同)

讀人しらす

あまくだるあらひと神のあひおひを

おもへばひさしすみよしのまつ (拾遺)

安法

竹

あひおひ一此神の鎮座と共に神木として生ひ出でたる意

煙葉蒙籠侵夜色
風枝蕭颯欲秋聲
阮籍嘯場人步月
子猷看處鳥栖煙

和令孤相公栽竹
竹枝詞
章孝標

晉騎兵參軍王子猷
裁稱此君
唐太子賓客白

修竹冬青序
篤茂

樂天愛爲吾友

禁庭植竹
前中書王

逆筍未抽鳴鳳管
盤根纒點臥龍文

世にふればことの葉しけきくれ竹の

阮籍一晉の人竹林七賢の一人也
子猷一竹を愛し何ぞ一日も此君無かる可けんやと云へり
太子賓客一官名
鳴鳳管一黃帝伶倫氏をして竹を崑崙に取りて笛を作らせしを云ふ

うきふしごとにくぐひすの鳴く (古今)
しぐれするおとはすれどもくれ竹の
などよとともに色もかはらぬ (古今六帖)

草

沙頭雨染斑々草。水面風驅瑟瑟波。
西施顔色今何在。應在春風百草頭。
瓢箪屢空草滋顔淵之蒼。藜藿深鎖雨濕二原
憲之樞。鳥聲露暖漸綿纈。
華山有馬蹄猶露。傳野無人路漸滋。
かのをかに草かるをのこしかなかりそ

早春憶微之
春詞元稹
申文直幹
春日山居後江相公
遠草初含色
保胤

素性
讀人しらす

おほあらしきの森
あひたけ高く
のび立ちたるを
人の齡高き以上
そふ
もえ一萌え、上
よりの縁にて燃
えを兼ね

鶴有乘軒一衛
懿公鶴を好みて
車に乗せしこと
雀能穿屋一詩
經に出づ
屈原江南に流
され漁夫の辭を
作り「衆人皆醉
我獨醒」の語あり
五老峯一廬山の
最高峯

鶴

ありつよも君がきまさんみまくさにせん (拾遺)
おほあらしきの森のした草おひぬれば
駒もすさめずかるひともし (古今)
やかすとも草はもえなんかすが野を
たゞ春の日にまかせたらなん (新古今)

人丸
重之
忠見

嫌小人而踏高位。鶴有乘軒。惡利口之
覆二邦家。雀能穿屋。

王鳳凰賦
賈嶋

同二李陵之入胡。但見異類。似屈原之有楚。衆
人皆醉。
聲來二枕上。千年鶴。影落二盃中。五老峯。

鶴覆二群雞一賦
皇甫曾
題三元八溪居一
白

清唳數聲松下鶴。寒光一點竹間燈。
 雙舞庭前花落處。數聲池上月明時。
 鶴歸舊里丁令威。詞可聽。龍迎新儀陶安公之
 駕。在眼。

飢饉性躁。恩々乳。老鶴心閑。緩々眠。
 叫漢遙驚孤枕夢。和風漫入五絃彈。

わかかの浦に汐みちくればかたをなみ

あし邊をさしてたづ鳴きわたる (萬葉)

大空にむれたるたづのさしながら

おもふこころのありけなるかな (拾遺)

あまつかぜふけひの浦にるるたづの

などかくも井にかへらざるべき (新古今)

在家出家
 贈鶴詩
 劉禹錫

神仙策
 都良香

晚春題天台山
 同

霜天夜聞鶴聲
 順

赤人

伊勢

清正

丁令威一月の部に
 陶安公一仙人
 也、赤龍に乗り
 て去る
 乳一子をはぐく
 む
 五絃彈一白樂天
 の詩
 かたをなみ一干
 瀉無くして也
 然
 さしながら一宛
 泉
 ふけひの浦一和

猿

瑤臺霜滿一聲之立鶴唳天。巴峽秋深五夜之

哀猿叫月

江從巴峽初成字。猿過二巫陽始斷腸。

三聲猿後垂二鄉淚。一葉舟中載二病身。

胡鴈一聲秋破二商客之夢。巴猿三叫曉露二行

人裳

人煙一穗秋村僻。猿叫三聲曉峽深。

曉峽蘿深猿一叫。暮林花落鳥先鳴。

谷靜讒聞二山鳥語。梯危斜踏二峽猿聲。

わびしらにましらな鳴きそあしびきの

清賦
 謝觀

送蕭處士遊黔南
 白

舟夜贈内
 同

山水策
 澄明

秋山閑望
 紀納言

山中感懷
 江相公

送歸山僧
 同

瑤臺一仙人の居
 る玉のうてな
 巴峽一三峽の一
 五夜一五更
 字一巴の字
 商客一旅商人
 江相公一扶桑集
 によれば大江朝
 綱作也 後江相
 公とあるべし
 次句も日本詩紀
 に據るに同斷な
 り
 わびしらに一侘
 しげに

山のかひあるけふにやはあらぬ (古今)

躬 恒

管絃 附舞妓

織山—王子晉の故事

一聲鳳管秋驚秦嶺之雲 數拍霓裳曉送緜山

蓮昌宮賦 公乘億

疎韻落—秋風の松の梢を拂ふが如く寂しき音を發す

第一第二絃索々々秋風拂松疎韻落 第三第四絃冷々々夜鶴憶子籠中鳴 第五絃聲尤掩抑瀧

五絃彈 白

隨分—又あふなあふなと訓ず、分相應の意、原詩「隨分笙歌聊自樂」

隨分管絃還自足 等閑篇詠被二人知 頓令燈下裁衣婦 誤剪同心一片花 羅綺之爲重衣 妬無情於機婦 管絃之在長曲 怒不関於伶人

重答劉和州 同 聞夜笛 章孝標 春娃無氣力—詩序 管

落梅、折柳—共に曲名 相如—漢の司馬相如琴心を以て卓文君を挑みし故事 簾中—婦人

落梅曲舊脣吹雪 折柳聲新 手掬煙 相如昔挑文君一得 莫使二簾中子細聽

花間理—管絃— 听彈琴 惟高親王

ことのねに峯のまつかぜかよふらし いづれの緒よりしらべそめけん (拾遺)

齋宮女御

文詞 附遺文

詞—或は「辭」に作る 綴—又いぐるみと訓ず 遺文—元少尹の遺稿をさす 龍門—同人を葬りし地 言語云々—薛濤を評して云ふ

沈詞怫悅若遊魚銜鉤而出 二重淵之底 浮藻 聯翩若三翰鳥 纓繖而墜 會雲之峻 遺文三十軸 軸々金玉聲 龍門原上土埋骨 不埋名

文選文賦 陸士衡 題—故元少尹集— 贈薛濤— 元稹 讚—韓侍郎及弟詩— 章孝標

言語巧偷鸚鵡舌 文章分得鳳凰毛 錦帳曉開雲母殿 白珠秋寫水精盤

昨日山中の木。材取於己。今日庭前之花。詞慙

於人

王朗八葉之孫。撫徐詹事之舊草。江淹一時之

友。集范別駕之遺文。

陳孔璋詞。空愈病。馬相如賦。只凌雲。

贈爵新恩。銘刻石。獲麟後集。世知丘。

いつはりのなき世なりせばいばかり

ひとのこの葉うれしからまし (古今)

讀人しらす

雨來花自濕詩序 茂

敬公集序 順

題英明集 尊

過音丞相廣拜安樂寺 以

酒

新豐酒色清。冷於鸚鵡盃之中。長樂歌聲幽。

咽於鳳凰管之裏。

送友人歸大梁賦 公乘億

晉建威將軍劉伯倫嗜酒。作酒德頌。傳於世。

唐太子賓客白樂天亦嗜酒。作酒功讚。以

繼之。

酒功讚序 白

臨風杪秋樹。對酒長年人。醉貌如霜葉。

雖風紅。不是春。

醉中對紅葉 同

送蕭處士遊黔南 同

賞酒之詩 同

琴酒 同

煖寒從飲酒詩序 匡

內宴詩序 江相公

長年一老年
置一誤草(ワス
レグサ)
榮期一榮啓期孔
子の間に答ふる
に三樂を以て
す、列子に出づ
下若村一若溪は
長村興縣の南溪
にあり、南を上
若北を下若とい
ふ、村人下若の
水を取りて酒を
醸すに味甚だ美
なりといふ

生計拋來詩是業。家園忘却酒爲鄉。
茶能散悶。爲功淺。萱道忘憂。得力微。
若使榮期兼解醉。應言四樂不言三。
醉鄉氏之國。四時獨誇溫。和之天。酒泉郡之民。
一頃未知。涸陰之地。
菓則上林苑之所獻。含自消。酒是下若村
之取傳。傾甚美。

建德—莊子に曰く、南越に邑あり建德といふ其民愚朴寡欲と無何—寂寞無爲の境也、莊子に見ゆ

先逢^{あつてけん}阮籍^{せきにし}爲^な二郷導^{きやうどう}。漸^{やうやくついでり}就^{ついでり}劉伶^{れいじ}問^と土風^{ふふう}。邑隣^{いふはなつてけん}建德^{せきにし}非^{あらざる}二行步^{ほに}。境接^{さかひはまじはつて}無^な何^{すなはち}一便坐^{まうす}忘^す。王勣^{わうききやう}鄉霞^{きやうかすみ}紫^{むらさき}浪^{なみ}脆^{もろく}。嵇康^{けいかう}山雪^{やまゆきは}逐^{おつて}流^{ながれ}飛^{をま}。ありあけの心地こそすれさかづきの

ひかりもそひていでぬと思へば (拾遺)

山 附山水

黛色—遠山の翠色
純扇—白き練絹の團扇
谷心—谷間、谷の中心

黛^{まゆずみのいろ}色^は迥^{はるか}臨^か蒼海上^{さいのうへに}。泉聲^{いづみのこゑ}遙^{はるか}落^{おつ}白雲中^{はくうんのうち}。勝地^{しょうち}本^{もと}來^{より}無^{なし}二定^{さだま}主^{しゆ}。太都^{たいう}山屬^{やまは}二愛^あレ山人^{じん}。夜鶴^{やかく}眠^ね驚^{おどろ}松月^{しょうげつ}苦^く。曉^{けう}鷗^う飛^{おち}落^た峽烟寒^{せつえんさむ}。紈扇^{わんせん}抛^{なげ}來^{きた}青黛^{せいだい}露^る。羅帷^{らゐ}卷^ま却^{かへ}翠屏^{すいへい}明^あ。衆籟^{しゆい}曉^{けう}興^{おこ}林頂^{りんてい}老^{らう}。群源^{ぐんげん}暮^{くれ}叩^{たた}谷心^{こころ}寒^{さむ}。

入^い二醉鄉^{すいけう}贈^{たま}納言^{なつげん}公^{こう}。橘^{たちばな}相^あ公^{こう}。同^{どう}。後^{のち}中書王^{ちゆうしゆわう}。醉看^{すいけん}二落^お水花^{すいけ}。胤^{ゆい}。能^{のう}宣^{せん}。題^{だい}二百丈山^{にひやくざうざん}。賀^が蘭^{らん}暹^{せん}。遊^{ゆう}雲居寺^{うんこにじ}贈^{たま}穆^{もく}三十六地主^{じちしゆ}。白^{はく}。題^{だい}二遙嶺暮烟^{てうれいぼくえん}。都^{みやこ}在^あ中^{ちゆう}。遠山^{てんざん}暮烟^{ぼくえん}歛^{しん}。後^{のち}中書王^{ちゆうしゆわう}。秋聲^{しゆせい}在^あ山^{ざん}。以^{もつ}言^{げん}。

名のみして云々—三笠山といふ名はあれど山には笠なくして朝日夕日のさすに任せたり

名のみして山はみかさもなかりけり
あさ日ゆふ日のさすにまかせて (拾遺)
くものゐるこしのしら山おいにけり
おほくのとし野雪つもりつよ (同)
みわたせば松の葉しろきよし野やま
いく世つもれる雪にかあるらん (同)

山 水

巴猿—巴峽の猿聲
黃砂磧—黃色の砂塵の立つ胡國の砂漠

泰山^{たいざん}不^{ゆる}讓^ら二土壤^{じやうを}故^ゆ能^よ成^な二其高^{そのたかさ}。河海^{かうかい}不^い厭^は二細流^{さいりゆう}故^ゆ能^よ成^な二其深^{そのふかき}。巴猿^{はゑん}一^{ひと}叫^{こゑ}停^{とど}二舟^{ふね}於^を明月峽^{めいげつがふの}之^の邊^{はざりに}。胡馬^{こば}忽^{たちまち}嘶^{いは}失^え二路^{みち}於^を黃砂磧^{わうさつせき}之^の裏^{うち}。

貫^{くわん}之^の。兼^{けん}盛^{せい}。忠^{ちゆう}岑^{じん}。上^{じやう}二秦王^{せいおう}書^{しよ}。李^り斯^し。愁^{しゆう}賦^ふ。公^{こう}乘^{じやう}德^{とく}。

扶疎—枝の繁りて四方に分布すること
 韓康—後漢の人名山に採藥す
 削形色—原文「鑿」石「波」

礙日暮山青簇々
 浸天秋水白茫茫
 漁舟火影寒燒浪
 驛路鈴聲夜過山
 山似屏風江似簾
 叩舷來往月中
 草木扶疎春風梳山祇之髮
 魚鼈遊戲秋水
 養河伯之民
 范蠡遍舟之泊烟波
 韓康獨往之栖花藥如舊
 山水策江澄明
 惟新
 山復山何工削成青巖之形
 水復水誰家染
 出碧潭之色
 山郵遠樹雲開處
 海岸孤村日霽時
 山成二向背斜陽裏
 水似二廻流迅瀨間
 かみなびのみむろの岸やくづるらん

登西樓—憶—行簡—
 秋夜宿—臨江驛—
 泛舟—
 劉禹錫
 同
 同
 春日送別—直—
 幹
 春日山居—
 後江相公

たつたの川の水のごれる (拾遺)

時平

水 附漁父

邊城—國境にありて夷狄の侵入に備ふる城
 青草湖—一名重湖、北洞庭湖と相連なる
 舫—小舟也
 本主—舊主、先主字多帝をいふ

邊城之牧馬頻嘶平沙渺々
 江路之征帆盡
 去遠岸蒼々
 洲芳杜若抽心長沙暖鴛鴦數翅眠
 帆開青草湖中去
 衣濕黃梅雨裡行
 水驛路穿兒店月
 花船棹入二女湖春
 菰蘆杓酌二春濃酒
 舫舫舟流二夜漲灘
 閑居屬二於誰人—紫宸殿之本主也
 秋水見二於何處—朱雀院之新家也
 垂釣者不得魚暗思二浮遊之有—意
 移棹者唯

曉賦謝觀
 樂府昆明春水滿詩
 白
 送客之—湖南—
 同
 送劉中赴郎—任蘇州—
 同
 戲贈—漁家—
 杜荀鶴
 閑居樂—秋水—序
 菅

刻印—足跡を
いふ
横書—雁行を
文字に譬へいふ

ちり—散り、塵

みなかみ—その
かみの意を水の
縁にて水上とい
へる也、歌の意
は「圓融院御時
堀川院に二度行
幸せさせ給ひけ
るによめる」の
詞書にて明か也

仙郎—宮中に宿
直する人
三千—一に「三
十」に作る、従ふ
べし

聞雁遙感二旅宿之隨_レ時_〇

沙頭刻印_〇 遊處_〇 水底模_レ書雁度時_〇

日脚波平_〇 孤鳴暮_〇 風頭岸遠_〇 客帆寒_〇

としをへてはなのかどみとなる水は

ちりかよるをやくもるといふらん (古今)

みなかみのさだめてければ君がよに

ふたよびすめるほり川の水 (詞花)

禁中

鳳地後面新秋月_〇 龍闕前頭薄暮山_〇

秋月高懸空碧外_〇 仙郎靜翫禁闈間_〇

三千仙人誰得_レ聽_〇 含元殿角管絃聲_〇

題二東北舊院小寄亭_〇
八月十五日夜開_〇崔大負外翰林
獨直對_〇酒_〇酒_〇月_〇因_〇懷_〇禁_〇中_〇清_〇景_〇
及第日報_〇破_〇東_〇平_〇
章_〇孝_〇標_〇

人曉唱_〇聲_〇驚_〇明_〇王_〇之_〇眠_〇 鳧鐘夜鳴響徹_〇

暗天之聽_〇

朝候日高冠額拔_〇 夜行沙厚履聲忙_〇

みかきもり衛士のたく火にあらねども

われもこよろのうちこそたけ (家集)

こよにだにひかりさやけき秋のつき

雲のうへこそおもひやられるれ (拾遺)

漏刻策

都良香

中務

藤原經信

古京

綠草如今麋鹿苑_〇 紅花定昔管絃家_〇

いそのかみふるきみやこを來て見れば

むかしかざしと花さきにけり (新古今)

過_〇平_〇城_〇古_〇京_〇
菅_〇三_〇品_〇

讀人しらす

鳧人—且を報じ
て百官を呼び起
す役人
鳧鐘—鐘のこ
と、鳧氏鐘を鐘
る故に云ふ
朝候—諸官每朝
の出仕、此詩作
者出典未詳
日高云々—運刻
して冠の抜け落
ちんとするも心
附かざる周章の
状也

いそのかみ—ふ
るに掛る枕詞

故宮 附故宅

獲落一空廓たる

陰森古柳疎槐。春無春色。獲落危牖壞宇秋。

有秋聲。

連昌宮賦
公乘億
題于家公主舊宅

臺傾滑石猶殘。簾斷眞珠不滿鈎。

強吳滅兮有荆棘。姑蘇臺之露瀼々。暴秦衰兮

無二虎狼。感陽宮之煙片片。

河原院賦
嵯峨舊院即事

老鶴從來仙洞駕。寒雲在昔妓樓衣。

孤花裏露啼殘粉。暮鳥栖風守廢籬。

題后妃舊院
夏春道
屋舍壞

向晚簾頭生白露。終宵床底見青天。

秋日過三仁和寺
源英明

荒籬見露秋蘭泣。深洞聞風老檜悲。

きみなくて荒れたるやどの板間より

滑石一もと礎と
したる滑かなる
石
姑蘇臺一吳王闔
廡の築く所
咸陽宮一秦の始
皇帝の宮殿

つきのもるにも袖はぬれけり (古今六帖)

君なくてけぶり絶えにしほがまの

うらさびしくも見えわたるかな (古今)

いにしへは散るをや人のをしみけん

今は花こそむかしこふらし (家集)

貫之

一條攝政

仙家 附道士隱倫

幽栖
元積

尋郭道士不遇

白
ト山居
温庭筠

山底探薇雲不厭。洞中栽樹鶴先知。

三壺雲浮七萬里之程分浪。五城霞峙十二

樓之構插天。

神仙策
都良香

壺中天地一費長
房仙翁の壺中に
入りて歡樂を極
めし故事あり
丹一丹藥

三壺一方壺蓬壺
瀛壺の三神山
五城十二樓一崑崙
崑崙に仙人居る所

うらさびし何
となく心さび
し、浦を掛く

奇犬吠花聲流於紅桃之浦。驚風振葉香分於

紫桂之林。

入二仙家雖爲二半日之客。恐歸舊里纔逢二

七世之孫。

丹竈道成仙室靜。山中景色月花低。

石床留洞嵐空拂。玉案拋林鳥獨鳴。

桃李不言春幾暮。煙霞無跡昔誰栖。

王喬一去雲長斷。早晚笙聲歸二故溪。

高山月落秋鬢白。潁水波揚左耳清。

虛澗有聲寒溜咽。故山無主晚雲孤。

通夢夜深蘿洞月。尋跡春暮柳門塵。

ぬれてほすやまのりの菊のつゆのまに

同

二條院宴落花亂雜衣序
後江相公

山中有二仙室
菅三品

同

同

同

同

山中自述
後江相公

山無二隱士
紀納言

遠念二賢士風
菅

謬入仙家一王
質石室中に童子
の圍棋を見て斧
柯朽ちし故事
七世之孫劉晨
阮肇天台山に探
薬し道を失うて
仙女に會ひ七代
を経て歸る
石床、玉案、仙
人のとことつく
る

潁水云々許由
碧の讓を受けざ
りし故事
虚澗一人氣なき
谷
柳門一陶淵明の
こと

いつかちとせを我はへにけん (古今)

素性

山家

遺愛寺鐘敲枕聽。香爐峰雪撥簾看。

蘭省花時錦帳下。廬山雨夜草庵中。

漁父晚船分浦釣。牧童寒笛倚牛吹。

王尚書之蓮府麗。則麗。恨唯有二紅顏之賓。

嵇仲散之竹林幽。則幽。嫌三殆非二素

論之士。

南望則有二關路之長。行人征馬絡二釋於翠簾之

下。東顧亦有二林塘之妙。紫鴛白鷗道二遙於

朱檻之前。

寺近二香爐峰下

廬山草堂雨夜獨宿

登三石壁水閣

杜荀鶴

尚齒會詩序

菅三品

秋花逐露開詩序

順

王尚書一齊の王
儉也、時人儉の
府を運府と云ふ
素論之士一老
人、素は白髪を
いひ、論は倫に
通ず

蘭省一尚書省を
云ふ

澗戸―谷の入口

山路日暮。滿耳者樵歌。牧笛之聲。澗戸鳥歸。遮。

眼者竹烟松霧之色。

暮春遊覽賦序

紀齊名

花間覓友。鶯交語。洞裏移家。鶴卜隣。

卜山居

紀納言

晴後青山。臨牖近。雨初白水。入門流。

田家之早秋

都良香

觸石春雲。生枕上。銜峰曉。月出窓中。

春宿山寺

直幹

山とは物のさびしきことこそあれ

よのうきよりはすみよかりけり (古今)

讀人しらす

やまざとは冬ぞさびしさまさりける

人めもくさもかれぬとおもへば (同)

宗干朝臣

かれぬ―草の枯る人と人の來訪なきとの兩意

田家

碧毯線頭。抽早稻。青羅裾帶。展新蒲。

春題湖水上

白

守家一犬。迎人吠。

放野群牛。引犢休。

田家早秋

都良香

野酌卯時。桑葉露。

山畦甲日。稻花風。

田家秋意

紀齊名

蕭索村風。吹笛處。

荒涼隣月。擣衣程。

同

高相如

春の田をひとにまかせてわれはたど

花にこころをつくるころかな (拾遺)

齋宮内侍

時すぎばさなへもいたく老いぬべし

あめにもたごはさはらざりけり (家集)

貫之

昨日こそさなへとりしかいつのまに

いな葉もそよと秋かぜぞ吹く (古今)

躬恒

隣家

明月好。同三徑夜。

綠楊宜。作兩家春。

與元八卜隣

白

いな葉もそよと―或は「いな葉そよぎて」此歌古今集には讀人不知とし、異本或は敏行に作る

たご―田を植うる賤

甲日―立秋後のきのえの日百穀熟すといへり

可一或は何
不_レに作る
陸張一陸惠
白融の二人

君がやど一此歌
貫之集に見えて
二句「我が宿わ
ける」四句「う
つろはぬ時」

雙峰寺一香山寺
と遺愛寺と

朝天之門一朝廷
出仕に出入せる
我家の門
求車一求法の意
関水之橋一門前
の小水に架せる

鳥路一空

十二因縁一衆生
の三世に輪回す
る相に十二の名
目あり
聲聞一阿羅果の
聖者にて未だ佛
菩薩の證果を得
ざる者
色相一形にあら
はれたる無常變
易の假法

隱_レ之一月の存
在に喩ふ

可_レ獨終_レ身數相見_{一〇} 子孫長作_二隔_レ牆人_{一〇}

池邊別業是何人_{一〇} 聞道陸張昔_二卜_レ隣_{一〇}

落枕波聲分_レ岸夢_{一〇} 當_レ簾柳色兩家春_{一〇}

春烟遞讓_二簾前色_{一〇} 曉浪潛分_二枕上聲_{一〇}

君がやどわがやどわくるかきつばた

うつろはぬまに見ん人もがな (六帖)

山寺

千株松下雙峰寺_{一〇} 一葉舟中萬里身_{一〇}

更無_二俗物當_二人眼_{一〇} 但有_二泉聲洗_二我心_{一〇}

不_レ改_二朝天之門_{一〇} 便作_二求車之所_{一〇} 不_レ變_二関水之橋_{一〇}

以爲_二到岸之途_{一〇}

策_レ馬來時_{一〇} 只思_二風烟之可_レ厭_{一〇} 逢_レ僧談處_{一〇} 漸

覺_二世俗之皆空_{一〇}

人如_二鳥路_{一〇} 穿_レ雲出_{一〇} 地是_二龍門_{一〇} 趨_レ水登_{一〇}

三千_二世界_{一〇} 眼前_二盡_{一〇} 十二_二因縁_{一〇} 心裏_二空_{一〇}

泉飛_二雨洗_{一〇} 聲聞_二夢_{一〇} 葉落_二風吹_{一〇} 色相_二秋_{一〇}

やまでらのいりあひの鐘のこゑごと

けふも暮れぬと聞くぞかなしき (拾遺)

このもとをすみかとするればおのづから

はな見る人になりけるかな (榮花物語)

佛事

月_{一〇} 隱_二重山_{一〇} 兮_{一〇} 舉_レ扇_{一〇} 喩_レ之_{一〇} 風_{一〇} 息_二大虚_{一〇} 兮_{一〇} 動_レ

同 題_二隣家_{一〇} 菅_三品

同 同 同

卜_二隣家_{一〇} 直_{一〇} 幹

伊 勢

香山寺隱居

宿_二靈岩寺上院_{一〇} 白

慈恩寺初會詩序

野相公

遊_二圓成寺上方_{一〇} 序 源 英 明

遊_二龍門寺_{一〇} 菅 丞 相

竹生島作 都 良 香

石山寺作 高 相 如

花山院

讀人しらす

樹教之

願以今生世俗文字之業狂言綺語之誤

爲當來世々讚佛乘之因轉法輪之緣

百千萬劫菩提種八十年功德林

十方佛土之中以西一方爲望九品蓮臺之間

雖下品一應足

雖十惡一猶引攝甚於疾風披雲霧

一念一必感應喻之巨海納涓露

昔切利天之安居九十日刻赤梅檀而模二尊容

今跋提河之滅度二千年瑩紫磨金而禮二兩

足浪洗欲消鞭竹馬而不顧雨打易破

止觀第一文 智者大師

洛中集記 白

贈鉢塔院如滿大師詩 同

極樂寺建立願文 胤

讚二極樂寺 江匡衡

仁康上人奉造丈六釋迦願文 同

芥鷄而長忘

念二極樂之尊一夜山月正圓

三朝洞花欲落先二句典之會

玉磬聲思二管絃奏納衣僧代二綺羅人

眼蓮豈養二清涼水面月長留二十五天

以二佛神通一何酌盡經僧祇劫一欲二朝宗

叩凍負來寒谷月拂霜拾盡暮山雲

已終二未習千年役初得難遇一乘文

この世にて菩提のたねをうゑつれば

君がひくべき身とぞなりぬる

阿耨多羅三藐三菩提のほとけたち

わがたつそまに冥加あらせたまへ(新古今)

勸學會詩序 紀齊名

九條右丞相花亭法華會詩序 野相公

贈二阿難尊者一詩 齊名

弘誓深如海詩 以言

採菓汲水詩 胤

同 胤

同 胤

同 胤

左相庫

傳教大師

讚佛乘一佛法の功德をほむること
轉法輪一教法を説きて邪見を破るること
百千萬劫一劫は時なり
九品一上中下の三品に各々上中下の三生あり、極樂往生の階級也
十惡一殺生偷盜邪淫妄語綺語惡口兩舌貪欲嗔恚愚痴
切利天一欲界六天中の第一也、須彌山頂にして帝釋此に居る
紫磨金一黄金の美なる物
兩足一福智具足の意、佛の別稱

芥鷄一季平子と師匠伯と對鷄をなしたる故事、左傳昭公廿五年の條に出づ、句典一山の名、漢の時三茅君此山に居る、宣帝初元四年三月十八日茅盈君登仙す
面月一阿難尊者の面淨滿の月の如し
何一或は争に作る
僧祇劫一僧祇は無量也、劫は時なり
朝宗一百川の海を宗として朝する也
君がひくべき一彌陀の引接し給ふべき
阿耨多羅三藐三菩提一無上正遍智の佛なり

極樂ははるけきほど聞きしかど

つとめていたるところなりけり (千載)

いつしかと君におもひし若菜をば

法のためにぞけふは摘みつる (拾遺)

空也上人

村上御製

僧

蒼茫霧雨之晴初寒汀鷺立。重疊煙嵐之斷

處。晚寺僧歸。

閑居賦

張讀

芳林花さきて
芳ばしき林

野寺訪僧歸。帶月。芳林携客醉眠花。

五臺支那五臺
山文珠院

堂有母儀。莫以。逗留於中天之月。室有二師

逢醞一條寺僧正歸家
英甲

錢入唐僧詩序
保胤

以僧智喻明鏡
野相公

觀。空淨侶。心懸。月。送老高僧首剃霜。

鶴閑翅。刷。千年雪。僧老眉垂八字霜。

たらちねはかよれとてしもうば玉の

わがくろ髪はなですやありけん (後撰)

世の中にうしのくるまのなかりせば

おもひのいへをいかでいでまし (拾遺)

三輪川のきよきながれにすよぎてし

わが名をさらに又やけがさん (續古今)

閑居

不獨記。東都履道里。有閑居。泰適之叟。亦令

知皇唐大和歲。有。二。理世安樂之音。

洛詩序

白

うしのくるま
法華譬喩品「爲
求牛車、出於火
宅」
おもひのらへ
火宅、煩惱の苦
み
三輪川の江談
抄「弘仁五年玄
賓坊任律師辭
退歌云」の序あ
らひてし衣の袖
はけがれざりけ
り

大和一年號

夏日遊般若寺

和子藤 材子登天台
山之什

源爲憲

遍昭

讀人しらす

立資

十二崑崙山の
仙宮
三千宮中の數
多の女官

宮車一去樓臺之十二長空
隙駟難追綺羅之
三千暗老

幽思不窮深巷無人之處
愁腸欲斷閑窓有

月之時

鶴籠開處見君子
書卷展時逢故人

人間榮耀因緣淺
林下幽閑氣味深

官途自此心長別
世事從今口不言

蕙帶蘿衣抽簪於北山之北
蘭橈桂楫鼓一舫

於東海之東
觀音寺只聽鐘聲

都府樓纔看瓦色
避喧猶臥竹窓風

陶門跡絕春朝雨
燕寢色衰秋夜霜

梅花亂舞衣詩序
江相公

奉同香爐峰下作
平佐幹

抽簪於北山之
北後漢法眞
の故事によりて
官を去り遁世す
るをいふ

東海齊の魯仲
連の故事
都府樓太宰府
をさして云ふ
陶門陶淵明の
門燕寢燕眠の室

わが宿はみちもなきまであれにけり

つれなき人をまつとせしまに (古今)

遍昭

眺望

風翻白浪花千片
雁點青天字一行

出紫闥而東望
山岳半插雲根之暗
踏翠

嶺而西顧
家鄉悉沒烟樹之深

見天台之高巖四十五尺浪白
望長安城

之遠樹百千萬莖
薺青

江霞隔浦人烟遠
湖水連天雁點遙

一行斜雁雲端滅
二月餘花野外飛

老眼易迷殘雨裏
春情難繫夕陽前

江樓晚眺

白

山寒花未披序
尊敬

春色生晴中序
順

遊崇福寺
直幹

春日眺望
順

同
篤茂

同
篤茂

天台一教の
根地
四十五尺浪一
天台の瀧を云ふ

紫闥禁門

こきまぜて一かきまぜて、一つにして

見わたせば柳さくらをこきまぜて

みやごぞ春のにしきなりける (古今)

素性

餞別

與君後會知何處 爲我今朝盡一盃

臨都驛送崔十八

前途程遠馳思於雁山之暮雲 後會期遙

於鴻臚館餞北客序 後江相公

昔聚二丹鳥競三寸陰於十五年之間 今促二晝

山河千里別序 順

熊欲分二手於三百盃之後 李門波高人

別路花飛白詩序 以言

楊岐路滑我之送人多年 送我何日 萬里東來何再日 一生西望是長襟

餞別詩 野相公

畫熊一車のこと、漢の制に上大夫の車の前板に熊を畫く、楊岐一楊朱、岐に泣くのご事、李門一後漢李膺、衆望ありし故事

九枝燈一燈臺の九枝なるをいふ、石火一人生の無常變易に喩ふ

九枝燈盡唯期曉 一葉舟飛不待秋 欲下以二浮世一期中後會上 還悲二石火向レ風敲

菅庶幾 同 知三裴大使之什 菅

おもひやる心ばかりはかはらじを

なにへだつらん峯のしらくも (後撰)

直幹

としごとの春のわかれをあはれとも

人におくるよひとぞ知りける (家集)

元真

いのちだに心にかなふものならば

なにかわかれの悲しからまし (古今)

白女

行旅

孤館宿時風帶雨 遠帆歸處水連雲

許渾

行々重行々 明月峽之曉色不盡 渺々復渺

いのちだに云々一命が心に叶ふものなら何の別が悲しからん、又逢ふ迄保ち難き命と思ふに斯くは悲しき也

長松一丈高き松
極浦一人里遠く
離れし浦

編處一配流の處

渺○長風浦之暮聲猶深○

曉入長松之洞岩泉咽兮嶺猿吟○ 夜宿極浦

之波青嵐吹兮皓月冷○

渡口郵船風定出○ 波頭謫處日晴看○

洲蘆夜雨他鄉淚○ 岸柳秋風遠塞情○

蒼波路遠雲千里○ 白霧山深鳥一聲○

ほのくくとあかしの浦のあざぎりに

しまかくれ行く舟をしぞおもふ (古今)

和田の原やそ島かけてこぎ出でぬと

人にはつけよあまのつりふね (同)

たよりあらばいかで都へつけやらん

けふしら川のせきは越えぬと (拾遺)

山河千里別序

別路江山遠序

將越謫處隱岐國

秋宿驛館

石山作

同

人丸

篁

兼盛

庚申

贈三王山人

庚申夜所懷

己酉年終冬日少 庚申夜半 曙光遲○

おきなかのえさるときなきつり舟は

いかでかは人にもとはんあやしきは

おもはぬなかのえさるまじきを

帝王附法皇

漢高三尺之劍坐制諸侯○ 張良一卷之書立

登二師傅○

後漢書文

庚申一道家の説
に 庚申の夜眠
れば三口蟲身に
災すとて其夜眠
らずに明す也
推一甲子一年月
の干支を推算す
ること

あきなかのえさ
るときなき一沖
中に魚を獲ざる
時無き意にカノ
エサルを隱題と
せり
いかでかは一武
は「いかになほ」
に作る
なかのえさるま
じきを一え去る
まじきの意にし
てやはり隱題也

一卷之書一黃石
公の授けし兵書

項莊一項羽の従弟
鴻門一地名
沛郡一高祖の舊里

饗皇一伏犧氏
向上人一對等以上の人

梁元一梁の元帝
周穆一周の穆王

崑閩一崑崙と閩風、共に仙人の居所
黃炎一黃帝軒轅氏、炎帝神農氏

項莊之會二 鴻門一寄情於一座之客一 漢祖之歸二

沛郡一傷二 思於四方之風一

四海安危照二 掌内一 百王理亂懸二 心中一

幸逢二 堯舜無爲化一 得作二 犧皇向上人一

聖皇自 在二 長生殿一 不向二 蓬萊王母家一

仁流二 秋津洲之外一 惠茂二 筑波山之陰一 淵變

作瀨之聲 寂々閉レ口 沙長 爲巖之頌 洋々

滿レ耳

梁元昔遊 春王之月漸落 周穆新會 西母之

雲欲歸

布政之庭 風流未下 必敵中 於崑閩 兼之者此

地也 好文之世 德化未必 光于黃炎

百鍊鏡 同
讚二太宗皇帝一
上陽春辭 楊 衡

古今和歌集序 紀 淑 望

村上仁壽殿詩序 菅 三 品

村上御時冷泉院宴會序 同

兼之者我君也 榮啓歸之歌 三樂未レ到二 常樂之門一 皇甫謐之述二

百王猶暗二 法皇之道一

玉辰日臨 文鳳見 紅旗風卷 畫龍揚

刑鞭蒲朽 螢空去 諫鼓苔深 鳥不驚

なにはづに咲くやこのはな冬ごもり

いまを春べと咲くやこのはな (古今)

散りぬれど又くるはるは咲きぬべし

ちとせののちは君をたのまん

王 仁
小松天皇

應二太上天皇制一序 後江相公
大極殿朝拜詩 藤原伊周
無爲治詩 江相公

庫車一低き車の衣
香衫一衫は一重

蒲一後漢劉覽寛仁也、人過有れば只蒲鞭を用ひて之を罪したりといふ故事
螢空去一月令に腐草化して螢となるといふに上る

親王 附王孫

庫車軟鞞 貴公主 香衫細馬 豪家郎

牡丹芳詩 白

漢皇一明帝をさす
齊帝一太祖

江都一江都王非
汝南王たり、材
力あり

鼎湖一黃帝の墓
所

梧岫一梧は蒼梧
の野也、堯帝の
墓所、岫は山の
洞

平臺一梁孝王の
居所

いかるが一大和
斑鳩の里
とみの小川一寛
小川、法隆寺の
東を流る
わがおほぎみ一
聖徳太子

東平蒼之雅量。寧非漢皇褒貴無雙之弟哉。
桂陽鏢之文辭。亦是齊帝寵愛第八之子
也。

江都之好勁捷也。七尺屏風其徒高淮南之
求神仙也。一旦乘雲而何益。

開卷已知爲子道。秋風悵望鼎湖雲。

我王孝行先何到。梧岫秋風一片煙。

此花非是人間種。瓊樹枝頭第二花。

此花非是人間種。再養平臺一片霞。

いかるがやとみの小川のたえばこそ

わがおほぎみのみなはわすれめ (拾遺)

丞相 附執政

親王書始詩序
菅三品

親王入學詩序
順

冷泉院第八親王始讀孝
經時詩序
保胤

同
菅雅規

同
名花在閑軒
後江相公

同
菅三品

達磨大師

季文子一魯の昭
公の相
公孫弘一漢武帝
に相たり

陳丞相一名は平
惠帝に相たり
袁司徒一名は安
後漢の人

忠仁公一藤原良
房

殷襄一殷帝の妻
に入ること

涇渭一共に水名

季文子妾不衣帛魯人以爲美談。公孫弘身服二
布被汲黯譏其多詐。

百里奚乞食於道路穆公委之以政。甯戚

子飼牛於車下桓公任之以國。

孫弘閣闢無閑客。傅說舟忙不借人。

西京席門乃是陳丞相之奮宅。南山芝澗寧

非袁司徒之幽栖。

周公旦者文王之子。武王之弟。自知其貴。忠

仁公者。皇帝之祖。皇后之父。世推其仁。

傅氏巖之嵐。雖風雲於殷夢之後。嚴陵瀨之

水猶涇渭於漢聘之初。

春過夏闌。袁司徒之家雪應二路達。且南暮

後漢書文

漢書文

宿裴司空池亭
白

清慎公辭攝政第三表
後江相公

貞信公天皇元服後辭攝
政表
菅三品

一條右相府辭右大臣表文
同

鄭太尉後漢の鄭弘若邪溪に薪を採る

北。鄭太尉之溪風被二人知。

同

山ざくらあくまでいろを見つるかな

はな散るべくも風ふかぬ世に (續古今)

兼盛

將軍

三尺劍光氷在手。

一張弓勢月當心。

贈李都使

陸將軍

雪中放馬朝尋跡。

雲外聞鴻夜射聲。

重和扶風老人活潑

白

千里往來征馬疲。

十年離別故人稀。

贈河東虞將軍

許渾

隴山雲暗李將軍在。

家。穎水浪閑祭征虜。

清慎公辭左近大將表

營三品

之未仕。

職列二虎牙。雖拉二武勇於漢四七將。學抽二

麟角。遂味二文章於魯二十篇。

右親衛藤原將讀論語序

順

寒玉一聲一文章の流麗なる形容

雄劍在腰拔則秋霜三尺。

雌黃自口吟亦寒

和歌所別當左衛中郎將奉行

同

玉一聲。

蛇驚二劍影一便逃死。

馬惡二衣香一欲嚙人。

送李將軍

都良香

玉くしげふたとせあはぬ君が身を

あけながらやはあらんと思ひし (後撰)

公忠

刺史

士女笙歌宜月下。

使君金紫稱花前。

甲香憶蘇州寄妻得

白

精明合浦珠相似。

斷割昆吾劍不如。

贈李尚書

同

雖三百盃莫二強辭邊土不

是醉鄉。此一兩

源順能登守刺史赴任時儀

別序保胤

句可重詠北陸豈亦詩國。

たかきやにのほりて見れば煙たつ

此歌實は藤原時

名劍

周穆王に獻せし

昆吾劍一西戎の

金紫一金印紫綬

使君一刺史

如し

刺史一州の長

官我國知事の

を掛く、五位の

あけ一緋(アケ)

玉くしげ一枕詞

のこと

馬云々一魏文帝

蛇云々一禹王の

こと

の流麗なる形容

平の「高殿にのぼりて見れば天の下四方に烟りて今ぞ富みぬる」を正しとすべし

詠史

たみのかまどはにぎはひにけり (新古今)

仁徳御皇

虞氏一項羽の寵姫

燈暗 數行虞氏涙 夜深四面楚歌聲

賦 項羽 橋相公

賓雁云々漢の蘇武の故事

賓雁繫書秋葉落 牡羊期乳歲花空

賦 蘇武 紀在昌

他日云々漢の叔孫通の故事

他日遂逃秦虎口 暮年初調漢龍顔

賦 叔孫通 紀納言

かぞいろはいかにあはれと思ふらん

みとせになりぬ足たとすして

朝網

王昭君

愁苦 辛勤 顛顛 頓盡 如今却似畫圖中 身化早爲胡朽骨 家留空作漢荒門

王昭君 同 紀納言

沙塞一胡國の要塞 淚行一涙の列り流るること

翠黛紅顏錦繡粧 泣尋沙塞出家郷 邊風吹斷秋心緒 隴水流添夜淚行 胡角一聲霜後夢 漢宮萬里月前腸 昭君若贈黃金賂 定是終身奉帝王

發句 後江相公 同胸句 同 同腰句 同 同末句 同

黃金賂一畫工に賂せざりし故に醜と畫かれて遂に胡に送られし也

身埋胡塞千重雪 眼盡巴山一點雲 數行暗淚孤雲外 一點愁眉落月邊

王昭君 同 王昭君 同 美人眉似三片月 同

あしびきの山がくれなるほとよぎす

實方

妓女

容貌似舅潘安仁之外 姪氣調如兄 崔季珪 之小 妹

遊仙窟文 長文 成

李延年—李夫人の兄
衛子夫—漢武帝の皇后

且—又かつと訓ず

嫌云々—此詩日本詩紀に失題と

外人^{うと}不^ず識^し承^る恩^を處^こ

唯^た有^り羅^衣染^御香^一

宮詞 元 種

嬋娟^{せんけん}兩^り鬢^{びん}秋^{あき}蟬^{せみ}翼^{つばき}

宛^{ゑん}轉^{てん}雙^{さう}蛾^が遠^{えん}山^{さん}色^{いろ}

井底引^{銀瓶} 別後寄^{美人}

莫^な怪^れ紅^さ巾^{きん}遮^さ面^{めん}咲^あ

春^{はる}風^{かぜ}吹^ふ綻^は牡^た丹^{たん}花^{はな}

同

李^り延^{えん}年^{ねん}之^が飭^{さく}族^{しゆ}託^{たく}一^{いつ}妍^{けん}以^{もつ}始^は飛^ひ

衛^{ゑい}子^し夫^ふ之^が待^{まつ}時^{とき}

主家樂^{斷詩序} 野相^公

在^あ衆^{しゆ}醜^{しう}而^に永^{なが}異^{こと}

秋^{あき}夜^よ待^{まつ}月^{つき}纒^{むす}望^{のぞ}出^い山^{やま}之^の清^{せい}光^{くわう}

同

穿^う水^{みづ}之^の紅^{こう}艷^{えん}

夏^{なつ}日^ひ思^{おも}蓮^{れん}初^は見^み

同

算^か取^へ宮^{きやう}人^{じん}才^{さい}色^{しき}兼^か

粧^{さう}樓^{ろう}未^{いま}下^{くだ}詔^{しよく}來^き添^そ

同

雙^{さう}鬢^{わん}且^{かつ}理^り春^{はる}雲^{うん}軟^か

片^{へん}黛^{たい}纒^{むす}成^な曉^{けう}月^{げつ}織^し

同

羅^ら袖^{しゆ}不^ず違^{たが}廻^ま火^か熨^ぬ

鳳^{ほう}釵^{さい}還^{かへ}悔^く鎖^さ香^{かう}匳^い

同

和^わ風^{ふう}先^ま導^び薰^い烟^{えん}出^い

珍^{ちん}重^{ちゆう}紅^{かう}房^{ぼう}透^す翠^{すい}簾^{れん}

同

嫌^{きら}寒^ふ錦^{きん}帳^{ちやう}長^{なが}薰^い殿^{てん}

惡^{にく}卷^ま珠^{しゆ}簾^{れん}晚^{ゑん}著^{しやく}

同

且^{かつ}又^{また}かつと訓ず

老^{らう}命^{めい}婦^ふ詩^し後^ご江^{かう}相^{しやう}公^{こう}

同

し、朗詠の或本には「佳人難出」佳人歎」など題し田達音の作とす
麟臺—賞しきこと

欲^{ほつ}宛^{えん}今^{こん}日^{にち}新^{あらた}饑^な爨^{さん}

泣^{なく}賣^う先^{せん}朝^{ちゆう}舊^{きゆう}賜^し箏^{そう}

老命婦詩 後江相公

あまつかぜ雲のかよひちふきとちよ
をとめのすがたしばしとどめん (古今)

遊女

寄^き所^{しよ}思^し佳^か人^{じん} 暹^{えん}

望^{ぼう}夫^{ふう}山^{さん}昔^{せき}貞^{てい}女^{にょ}
遠^{えん}征^{てい}の夫^{ふう}を送^{おく}り
て此^{こゝ}山^{さん}に登^{のぼ}り化^か
して石^{いし}と^となる

秋^{しゆ}水^{すい}未^{いま}鳴^な遊^{ゆう}女^{にょ}佩^{はい}

寒^{かん}雲^{うん}空^{くう}滿^{まん}望^{ぼう}夫^{ふう}山^{さん}

遊女序 以 言

翠^{すい}帳^{ちやう}紅^{かう}閨^{けい}萬^{まん}事^じ之^の禮^{らい}法^{ぽう}雖^い異^{こと}

舟^{しゆう}中^{ちゆう}浪^{なみ}上^{のう}一^{いつ}生^{しやう}

同

之^の歡^{くわん}會^{かい}是^{これ}同^{おな}

和^わ琴^{こん}緩^{くわん}調^{てう}臨^{りん}潭^{たん}月^{げつ}

唐^{たう}櫓^ろ高^{たかく}推^お入^し水^{すい}煙^{えん}

あまの子—遊女の異稱、又遊女の身を海士に喩へたるならんともいふ

しら波のよするなぎさに世をすぐす
あまの子なれば宿もさだめず (新古今)

老人

聲華一名聲榮華の義
潦倒一漂泊
不待一年の割よりも老いた

紅榮黃落一春花
咲き秋葉散る

綺里季一四皓の一人

昔爲二京洛聲華客。今作二江湖潦倒翁。

老眠早覺常殘夜。病力先衰不待年。

再三憐レ汝非他事。天寶遺民見漸稀。

紅榮黃落一樹之春色秋聲。結綬抽簪一

身之壯心老思。

少於樂天三年猶已衰之齡也。遊於勝地一

日是非老之幸一哉。

太公望之遇二周文。渭濱之波疊レ面。綺里季之

輔二漢惠。商山之月垂レ眉。

水無二返夕一流年淚。花豈重春暮齒粧。

晏坐閑吟

睡覺

贈二康叟

一條右大臣辭左大臣表
菅三品

左衛門尚齒會詩序

壽考策文

尚齒會詩
菅三品

校聲一我聲と
篇の聲とをくら
ぶ
餘算一餘命

林霧校聲鶯不老。岸風論力柳猶強。

醉對二落花一心自靜。眠思二餘算淚先紅。

ますかどみそこなる影にむかひるて見る

いづくにか身をばよせまし世の中に

老をいとはぬ人しなければ

同 菅三品
同 規

同 雅

躬 恒

爲 頼

交友

淡水交情一莊子
に「君子之交淡
如水」

青眼一愛好の
意、晉の阮籍の
故事による

蕭會稽一青允會

琴詩酒友皆抛我。雪月花時最憶君。

陽春曲調高難和。淡水分情老始知。

昔年願我長青眼。今日逢君已白頭。

蕭會稽之過二古廟。託締二異代之交。張僕射之重

寄二殷協律

報張十八員外以二新詩見

贈二押衙

許 渾

稽の郡丞たり
張僕射張縉の
こと、僕射は官
名
裴文籍渤海の
使臣
菅禮部道眞の
こと、禮部は治
部省を云ふ

ならなくに
「ならぬに」の延

黃壤—黃泉の意

舊遊—舊時交遊
の友
王尹橋—姑蘇に
あり

羊太傅—晉の羊
祜
岷山—祜が平生
遊憩の所
甘棠—詩に「蔽
芾甘棠勿剪召
伯所芟云々」と
あり、召公奭郷
邑を巡行して棠
樹下に刑政をな
し故事

新才推爲忘年之友

裴衣籍後聞君久 菅禮部孤見我新

君とわれいかなることをちぎりけん

むかしの世こそ知らまほしけれ (新千載)

たれをかもしる人にせん高砂の

まつもむかしの友ならなくに (古今)

懷舊

黃壤誰知我白頭獨憶君 唯將老年淚

灑故人文

長夜君先去 殘年我幾何 秋風滿袂淚泉下

故人多

交友序

後江相公

篤茂

村上御製

興風

題故元少君遺文之詩

白

同

同

贈微之十七韻

同

問江南景物

同

右大臣報恩願文

菅三品

安樂寺廟作文序

源相規

哭人

野美材

讀人不知

村上御製

世の中にあらましかばとおもふ人

あやしく目にもみつなみだかな (拾遺)

昔をばかけじと思へどかくばかり

もとのこよろを知る人ぞくむ (古今)

なきがおほくもなりにけるかな (同)

爲 頼

述 懷

專 諸 荆 卿 之 感 激 侯 生 豫 子 之 投 身 心 爲 之

恩 使 命 依 義 輕 義

後漢書文

范 蠡 收 責 勾 踐 乘 扁 舟 於 五 湖 咎 犯 謝 罪 文

公 亦 遂 巡 於 河 上

同

其 積 礫 不 窺 玉 淵 者 未 知 龍 之 處 蟠 也

習 其 弊 邑 不 視 上 邦 者 未 知 英 雄 之 處 躔 也

吳都賦 左 太 冲

人 間 禍 福 愚 難 料 世 上 風 波 老 不 禁

詠 懷 白

車 前 驥 病 駑 駘 逸 架 上 鷹 閑 鳥 雀 高

寄 當 途 李 逢 秀 才 許 渾

事 々 無 成 身 也 老 醉 鄉 不 去 欲 何 歸

醉 吟 白

荆卿一名は軻
侯生一名は原
豫子一名は讓
文公一晉文公重
耳
驪龍一黒色の龍
高一得意になり
て高く翔る意

范 蠡 收 責 棹 於 扁 舟 而 逃 名 謝 安 辭 功 鞭 孤

雲 而 養 志

述 懷 後 江 相 公

昇 殿 是 象 外 之 選 也 俗 骨 不 可 以 蹈 蓬 萊 之 雲 尙

書 亦 天 下 之 望 也 庸 才 不 可 以 攀 臺 閣 之 月

申 文 直 幹

齡 亞 顏 駟 過 三 代 而 猶 沈 恨 同 伯 鸞 歌 五 噫

而 將 去

詩 會 序 橘 正 通

言 下 暗 生 消 骨 火 喉 中 偷 銳 刺 人 刀

述 懷 春 道

載 二 鬼 一 車 何 足 畏 棹 二 巫 三 峽 未 爲 危

感 懷 詩 前 中 書 王

楚 三 閭 醒 終 何 益 周 伯 夷 饑 未 必 賢

橘 倚 平

何をして身のいたづらに老いにけん

としのおもはんこともやさしよ (古今)

讀 人 し ら ず

世の中はとてまかくてもおなじこと

三閭一官名、屈
原のこと
こともやさしく
一或は「やさしく
く又は「はづか
し」などに作る

かくばかり一本「しばしば」

宮もわらやもはてしなれば (新古今)
かくばかりへがたく見ゆる世の中に
うらやましくもすめる月かな (拾遺)

蟬丸

藤原高光

慶賀

雙鳳闕—宮殿の稱
吏部侍郎—式部大少輔の唐名
銀魚—銀魚袋也、束帶
綾鶴—綾の袍鶴の文
睦—一に「昵」に作る

劍佩曉趨雙鳳闕。烟波夜宿一漁船。
錢塘去國三千里。一道風光任意看。
想得江南諸父老。因君鞭撻子孫多。
吏部侍郎職侍中。著緋初出紫微宮。
銀魚腰底辭春浪。綾鶴衣間舞曉風。
花月一窓交昔睦。雲泥萬里眼今窮。
省躬還恥相知久。君是當初竹馬童。

夜宿—江浦

及第詩 章孝標

感—及第 同

贊—在衡 正 通

同胸句 同

同腰句 同

同末句 同

うれしさをむかしは袖につよみけり

こよひはみにもあまりぬるかな (新勅撰)

讀人しらす

祝

嘉辰令月歡無極。萬歲千秋樂未央。
長生殿裏春富。不老門前日月遲。

雜言詩

謝 偃

天子萬年 保胤

君が代はちよにやちよにさざれ石の

いはほとなりて苔のむすまで (古今)

讀人しらす

よろづ世とみかさの山ぞよばふなる

あめが下こそたのしかるらし (拾遺)

仲算

戀

よるづ世と云々—漢武帝の時中嶽太室に登り萬歳の聲を聞き之を封じて奉祠し、命じて崇高邑といひし故事

長門—長門宮、漢の孝武帝陳皇后居

寒温—時候の挨拶を通ずる手紙

一枝春—妙齡の美人を譬ふ蕭郎—梁武帝蕭衍の故事により侍中の事を云ふ

爲レ君 薰^二衣裳^一君聞^二蘭麝^一不^二馨香^一 爲レ君 事^二

容^レ飭^二君見^二金翠^一無^二顔色^一

更^レ闌夜^一靜^二長門^一圓而^レ不^レ開^二月^一冷^二風秋^一團扇^二杏而^レ共^レ絶^一

行宮^レ見^二月^一傷^レ心^二色^一 夜^レ雨^レ聞^レ猿^レ斷^レ腸^レ聲^一

春風^レ桃^レ李^レ花^レ開^二日^一 秋^レ露^レ梧^レ桐^レ葉^レ落^二時^一

夕^レ殿^レ螢^レ飛^レ思^レ悄^レ然^一 秋^レ燈^レ挑^レ盡^レ未^レ能^レ眠^一

南^レ朔^レ北^レ嚮^レ難^レ附^二寒^一温^レ於^二秋^一雁^一 東^レ出^二西^一流^レ只^レ寄^二瞻

望^レ於^二曉^一月^一

聞^レ得^二園中^一養^二花^一艷^一 請^レ君^レ許^レ折^二一^一枝^レ春^一

寒^レ閨^レ獨^レ臥^レ無^二夫^一婿^一 不^レ妨^レ蕭^レ郎^レ柱^二馬^一蹄^一

貞^レ女^レ峽^レ空^レ唯^レ月^レ色^一 窈^レ娘^レ堤^レ舊^レ獨^レ波^レ聲^一

大行路借^二夫婦^一以^レ譏^二君臣^一之不^レ終^一也 白

遊仙窟文 長文成

長恨歌 白

同 同 同

九條右丞相報吳越三書 後江相公

戀 紀齊名

和^二江侍郎來書^一 采女

和^二源規材子餞居作^一 爲^二憲

わが戀はゆくへもしらずはてもな

逢ふをかぎりとおもふばかりぞ (古今)

たのめつゝ來ぬ夜あまたになりぬれば

待たじといふぞ待つにまされる (拾遺)

いま來んといひしばかりになが月の

有明の月をまち出づるかな (古今)

躬 恒

人 丸

素 性

無常

岸額—蟬もたる岸のかど

まされる—まさりてつらし

觀^レ身^レ岸^レ額^レ離^レ根^レ草^一 論^レ命^レ江^レ頭^レ不^レ繫^レ舟^一

年^々歲^々花^々相^レ似^一 歲^々年^々人^々不^レ同^一

蝸^レ牛^レ角^レ上^レ爭^二何^一事^一 石^レ火^レ光^レ中^レ寄^二此^一身^一

生^レ者^レ必^レ滅^一釋^レ尊^レ未^レ免^二梅^一檀^レ之^レ烟^一 樂^レ盡^レ哀^レ來^レ天^レ人^一

無常 羅維

有^レ所^レ思^一 宋^レ之^レ問

對^レ酒^一 白

五衰—佛説に云ふ五つの衰相

春花裏名—莊子が夢に胡蝶となれる故事による

世の中を云々—萬葉には「世の中を何にたとへん朝びらきこぎいにし舟の跡なきがごとし」

世の中は云々—或本は此歌を載せず

猶逢三五衰之日

朝有紅顏誇二世路 暮爲白骨朽二郊原

雖觀二秋月波中影 未遁二春花夢裡名

世の中をなににたとへんあさほらけ

こぎゆく舟のあとのしらなみ (拾遺)

するの露もとのしづくや世のなかの

おくれさきだつためしなるらん (新古今)

手にむすぶ水にやどれる月かけの

あるかなきかの世にもすむかな (拾遺)

世の中はゆめかうつよかうつよとも

ゆめとも見えすありてなければ

白

願文

後江相公

中陰願文

義孝少將

無常

後江相公

滿誓法師

良僧正

貫之

燕丹云々—燕の太子丹秦に客たり、後國に歸されし故事

毛寶—晋の人也、龜に助けらる

王弘使—陶淵明に酒を送りしこと

晚花—菊のこと

かきわけて—本「ふみわけて」

閨夜猶行二明月地

人間却踏二白雲天

秦皇驚歎燕丹之去日烏頭 漢帝傷嗟蘇武

之來時鶴髮

銀河澄朗素秋天 又見林園白露圓

毛寶龜歸二寒浪底 王弘使立二晚花前

蘆洲月色隨二潮滿 葱嶺雲膚與二雪連

霜鶴沙鷗皆可可愛 唯嫌年鬢漸皤然

しらくしらけたる夜の月かけに

ゆきかきわけて花のはな折る

白賦

謝觀

同

白發句

同

胸句

同

腰句

同

末句

同

讀人しらす

新撰朗詠集 卷上

春

立春りつ しゆん

高卑—高き山も
低き山も

浅深何水氷猶結せん しん いづれのるづかこほりなほむすべる 高卑無二山雪不かうひ なしやまごしてゆき ずせいかこごきえ 消お

浮雲自後寒應ふ うんはこれよりのち かん べしあたまかなる 壯日如今去不さう じつはい ま さつてず かへら 歸かへら

年のうちに春たつことをかすが野の

わかなさへにも知りにけるかな (家集)

春無跡至争尋得はるはなうしてかこ いたるいかでかたづねん 老趁身來亦避難おいほごつてみま きたりまたさくろこごかたし

春がすみたてるを見ればあらたまの

としは山よりこゆるなりけり (拾遺)

立 春
同 菅

舊年春 貫 之
立 春 藤 篤 茂

紀 文 幹

早春

林外雪消山色靜。窓前春淺竹聲寒。著之於

幽溪則彩雲暖而黃鶯出。

煙生二村巷遙知柳。雪積二牆陰暗辨梅。

不醉爭辭溫樹下。建春門外雪埋春。

巖松雪宿諳二山北。岸草煙濃識二水東。

みしま江につのぐみわたる葦のねの

ひとよのほどにはるめきにけり (後拾遺)

みよし野は春のけしきに霞めども

むすほはれたるうぐひすのこゑ (同)

章振

陽春詞 都良香

巡檢山野 物部安興

元日賦宴 善相公

早春 橋在列

好忠

紫式部

あふさかの關をやはるのこえつらん

音羽の山のけさはかすめる (同)

橋俊綱

春興

綠油剪葉蒲新長。紅蠟黏枝杏欲開。

秦城樓閣鶯花裏。漢主山河錦繡中。

銅街陌柳條々翠。金谷園花片々燃。

居無常座掃苔而暫代筵。至無定家尋花

而不問主。

中殿曙香從吹染。上陽春色被煙陶。

萬事老來皆不敏。唯因二花鳥作二聰明。

衰鬢山陰多歲雪。浮榮花下一時春。

遊城東 白

清明日 杜甫

遊宴洛中 張野人

處花皆好 紀齊名

陽春詞 都良香

花鳥 田忠臣

暮春述懷 知房

新撰朗詠集

銅街—洛陽に銅
駝街あり
金谷園—晉崇季
倫の美女を聚め
奢遊を事とせし
別館
作聰明—春來
れるを明かに知
覺すとなるべし

こころあらん人にみせばや津の國の
なにはあたりの春のけしきを (後拾遺)
ゆきとまるところぞ春はなかりける

花にこころのあかぬかぎりは (同)

春夜

不^ず明^{あきらかならず} 不^く暗^{くらからうつく} 朧^{たるつき} 々^々 月^づ。
非^ず暖^{あたたかならず} 非^き寒^{じからまん} 漫^{たるかぜ} 々^々 風^づ。

春^{はるのよのほつしてあけなん} 夜^の 欲^の 明^の 望^の 牛^の 漢^の 之^の 西^の 轉^の 夏^の 日^の 告^の 朔^の 指^の 象^の

魏^の 而^の 北^の 轅^の

春の夜はいこそねられねおきむつよ

まもるにとまる花ならねども (家集)

子日

嘉陵夜月

白

能因

藤爲信

古廟春正暮

以言

泉式部

まもるに云々ト
見守り居たりと
て散らずに居る
べき花にはあら
ねども

牛漢一銀河
象魏一門闕也

はつね一初音と
初子とを掛く

千世を云々一思
ふ存分に千世を
引きたり

鹽梅鼎足臣一君
を輔くる賢良な
る三公のこと

嘯^{うそ} 野^の 煙^の 之^の 春^の 光^の 各^の 吟^の 一^の 句^の 酌^の 山^の 霞^の 之^の 晚^の 色^の

忽^の 醉^の 二^の 數^の 盃^の

松のうへに鳴くうぐひすの聲をこそ

はつねの日とはいふべかりけれ (拾遺)

姫小松おほかる野べにねの日して

千世をこころにまかせつるかな (玉葉)

めづらしき千世の子日のためしには

まづけふをこそひくべかりけれ (拾遺)

春日野遊

在列

能宣

源道濟

信賢中將

若菜

若^{もし} 尋^{たづね} 野^の 外^の 和^の 羹^の 主^の 便^の 是^の 鹽^の 梅^の 鼎^の 足^の 臣^の

かすが野におほくの年はつみつれど

子日屏風

義忠

おいせぬものはわかかななりけり (拾遺)

きみがため春の野にいでて若菜つむ

わがころもでに雪はふりつよ (古今)

しらのきのまだふる年のかすが野は

いざうちらはらひ若菜つみてん (後拾遺)

三月二日 附桃

昔成王之叔父周公旦。卜洛陽而濫觴。今聖

主之親舅左丞相。亦宅洛陽而宴飲。

醉鄉國之俗。伴鄭泉而得水。酒德頌之。文因

巴字一曲水宴を

因流泛酒盃 匡 衡

同

圓融院御製

仁和御製

能 宣

濫觴一さかづきをうかべたり、これ即ち曲水宴の起源といふ

巴字一曲水宴を

けふぞわがせこ花かづらせよ (新古今)

から人のふねをうかべてあそぶてふ

けふぞわがせこ花かづらせよ (新古今)

から人のふねをうかべてあそぶてふ

三月二日 附桃

昔成王之叔父周公旦。卜洛陽而濫觴。今聖

主之親舅左丞相。亦宅洛陽而宴飲。

醉鄉國之俗。伴鄭泉而得水。酒德頌之。文因

妓榭

水寫右軍三日會。花薰東閣萬年盃。

花筵晉日蘭亭飲。羽爵周年曲洛波。

周旦古風傳二曉。水一魏年昔浪寄春苔。

から人のふねをうかべてあそぶてふ

暮春

渭水橋邊春已度。灞陵原上雨初晴。

霞消李老青牛路。風去茅君白鶴峯。

伴霞難盡餘花艷。詞雪未歸好鳥聲。

ちる花にせきとめらるとやまがはの

桃始花 紀 家

因流泛酒盃 匡 衡

屏風三月三日 爲 政

羽爵泛流來 江 都 督

家 持

惠文太子 言

關山春欲暮 以 言

花鳥與春殘 明 衡

李老青牛路一李老は老子をいふ、高士傳に「老子爲周柱下史、後周德衰乃乘青牛車去入大秦過西關」云々

晉日永和九年王羲之禊事を修したるをいふ、蘭亭一會稽山陰にあり

ふかくも春のなりにけるかな (詞花)
ぬれつゝぞしひて折りつる年のうちに
春はいくかもあらじとおもへば (古今)

三月盡

四十六時 三月盡
送春争得不是慙
林間縱有二残花在
留到明朝不是春
人只送春吾送老
髮華頭鶴欲何歸
花落鶯啼携未別
登山臨水送將歸
花鳥縱雖期二向後
流年豈返老來身
はな見つゝ惜むかひなくけふ暮れて
ほかの春とやあすはなりなん

春去
三月晦
李方
送殘春
菅三品
三月盡
中書王
實之
實之
實之

春一異本「もの」と
いとかくけふを
一異本「今日を
わりなく」

添三十行之曆
日一聞にて一
ヶ月三十日の増
加せるをいふ

をしめども春のかぎりのけふの日の

ゆふぐれにさへなりにけるかな (後撰)

躬恒

花だにもちらでわかるゝ春ならば

いとかくけふを惜まましやは (家集)

朝忠中納言

閏二月

案頭則添三十行之曆日
窓前亦望二千萬
里之春風
風暖 嵩煙重卷翠
月明 洛水再沈珠
殘陽得聞 甘二重 聽
曆日添行 許二屢 攀
つねよりものどけかりつる春なれど
けふの暮るとはあかずもあるかな (拾遺)

今春又有春

順

後三月花鳥有餘香

同

齊名

躬恒

信樂近江
とやまに云々
異本「とやまの
霞春めきにけ
り」

娃美人
紅女紅は功に
同じ、織紙を業
とする女
墨子之涙墨子
練糸を見て哭し
たる故事

かすみぞ春のしるしなりける (續後拾遺)
きのふかもあられふりしは信樂の

とやまにかすみたなびきにけり (詞花)

雨

花疑漢女啼粧淚 水似吳娃咲弄箏

斜脚繰出紅女之手難施其功 輕質染來墨子

之淚尙悲其變

柳眼剪波春黛綠 桃顏流汗宿粧紅

寫得楊妃湯後壓 模成任氏汗來脣

瓦檐時誤鴛鴦浴 華樹還驚妓啼

水のおもにあやおりみだる春雨や

中務

惟成

訪山居過山
傳溫

密雨如散絲

春雨洗花顏

同 紀 家 言

對雨言志 高 五 常

やまのみどりをなべてそむらん (新古今)

はるさめの花のえだよりながれこば

なほこそ濡れめかもやうつると (後撰)

梅 附紅梅

歌聲怨處微々落 酒氣薰時艶々開

芬馥入簾夜添薰籠之氣 艷色逼砌影泛春

流之浪

瑠璃扉薄雖相邀 翡翠簾疎亦不妨

羌兒舊曲移殘溜 巫女別粧染曉風

半染秋毫浮硯水 斜薰春砌入珠簾

南薰風與南枝色 計會一時不辨香

伊勢

敏行

梅花白

翫前庭梅 藤 篤 茂

梅近香入窓 延喜御製

林香雨落梅 天曆御製

梅近香入窓 順

梅花琴上飛 源 時 綱

翡翠簾薄くし
て美しき簾
羌兒一章蘇州の
詩に「羌兒弄笛
曲未調」と見ゆ
るべし
鶯の聲をいふな
るべし
巫に「楚の襄王
の巫山に會せし
神女をいふなる
べし

しろたへのいもがころもに梅のはな

いろをも香をもわきぞかねつる (拾遺)

わがやどの梅のたちえや見えつらん

おもひのほかに君がきませる (同)

梅が香をよはのあらしの吹きためて

わがねやの戸のあくる待ちけり

紅梅

絳雪一赤き雪

剪丹霞而爲葩。便是春風之裁出。凝絳雪。

翫前庭紅梅

茂

葩皆三重不似流俗之樹。色自再入無待。

染人之功。

同順

洞深疑是仙方雪。水近應薰海岸香。

同

菅淳茂

不唯我愛一人來愛。一片紅粧直萬金。

英明

くれなるにいろをばかへて梅のはな

かぞことんにははざりける (後撰)

貫之

をられけりくれなるにほふ梅の花

けさしろたへに雪はふれよど (新古今)

宇治大政大臣

柳

不知細葉誰裁出。二月春風是剪刀。

垂柳元稹

居席暮深五柳門煙裊々。紅衣曉薄稠桑驛。

辨春秋以言

月蒼々

白雪花繁空撲地。綠絲枝弱不勝鶯。

楊柳白

五柳陶淵明のこと

ことんには白紅と別々に

桂一美人、此句垂柳を形容す

彭宅門閑 春緑鎖 武昌樓暗 暮煙深
春娃眠足 鴛衾重 老将腰疲 鳳劍垂
曉眼不眠 非夢蝶 春腰無力 欲栖鴉

柳影繁初合 保胤
弱柳不勝鶯 以言
詠柳 齊名

みちのべの朽木のやなぎはる來れば
あはれむかしのしのばれぞする (新古今)

ふるさとのみかきの柳はるくと
たがそめかけしあさみどりぞも (詞花)

菅家

道濟

あさみどりそめてみだると青柳の
いとをも春のかぜやとくらん (新勅撰)

是則

花

王船 艤兮 未出 春棹 容與 沙渚 之間 絲帷垂

容與一ゆるやかにためらふ

兮猶眠曉夢 芬芳書帙之下

入夜花如雪 齊名

遠臨十二因緣水 多勝 三千世界花

紅梅下作 江相公

句同唐帝專房女 粧咲秦醫一里兄

花木被知人 以言

門賓拾謁宜期夏 閨婦孤夢還 妬春

花時不在家 同

望疲雲嶺千條雪 跡入煙村一道霞

暮春尋花 四條大納言

落葉灑衣春拂雪 濃粧泛酒曉斟霞

紅梅花下作 菅之義

漢相閑閑空鏢雪 曹王園舊幾藩春

東西花色雨 明衡

枝留彩鳳桃源月 浪織藻龍柳岸風

花野皆錦繡 時棟

六十餘回看未飽 他生定作愛花人

逐年未飽花 佐國

粧繁鳥囀家園露 香亂馬嘶隴塞風

遠近春花滿 源成宗

あさみどり野べの霞はつとめども
こほれてにほふ花ざくらかな (菅家萬葉)

專房女一楊貴妃
拾謁一拜謁を求むること

漢相一蕭何
曹王一陳思王曹植

他生一來生

はる来てぞひととひくるやま里は

はなこそやどのあるじなりけれ (拾遺)

さくら花あかぬあまりにおもふかな

散らずば人やをしまざらまし

堀川右大臣

四條大納言

落花

遮^{さへぎ}沙^さ風^{ふう}而^を婉^{えん}轉^{てん}廻^{くわい}雪^{せつ}之^の袖^{そで}暗^{あん}薰^{くん} 過^{すぎ}巖^{がん}泉^{せん}而^を婆^は

渡水落花舞

匡 衡

婆^は落^{らく}霞^か之^の琴^{こと}遠^{とほ}和^わ

逸^{いつ}馬^ば嘶^{いは}晨^{ちん}風^{ふう}之^の中^{ちゆう}蹄^{てい}踏^{たふ}輕^{けい}質^{しつ}之^の雪^{ゆき} 征^{せい}衣^い過^{すぎ}夕^{せき}陽^{やう}

別路花飛白

以 言

雪^{せつ}膚^ふ路^ろ濕^{しつ}霓^い裳^{しやう}重^{おも} 風^{ふう}力^{りき}橋^{はし}高^{かう}錦^{きん}繡^{しゆう}明^{めい}

渡水落花舞

儀同三司

胡^こ關^{くわん}春^{しん}暮^ぼ難^{なん}留^{りゆう}雪^{せつ}

落花遠近飛

明 衡

廻雪之袖一舞の
巧妙なる形容
袖織云々一管の
寶酒の妻蘇氏夫
の秦州の刺史と
なり流沙に徙さ
れたる時之を思
ひて錦を織り回
文旋圖の詩を作
りて贈りし故事
にとる
カ一に「刀」に
作る

洛^{らく}水^{すい}流^{りゆう} 間^ま横^{おう}宿^{しゆく}雪^{せつ}

天^{てん}津^{しん}月^{げつ}下^げ渡^た殘^{ざん}春^{しん}

橋上落花多

第三親王具平

わがやどの櫻なれども散るときは

こころにえこそまかせざりけれ (詞花)

花山院御製

吹くかぜぞおもへばつらきさくら花

こころとちれる春しなければ (後拾遺)

大貳三位

躑躅

風^{かぜ}嫺^{れん}舞^ぶ腰^{こし}香^か不^ず盡^{つき}

露^{つゆ}消^け粧^ま粧^ま臉^{かほ}淚^{なみだ}新^{あたら}乾^か

山石榴花

白

紅^{こう}躑^{てい}躑^{てい}花^{はな}飛^と失^し艷^{えん}

白^{はく}鬚^{しゆ}髻^{げん}容^{かたち}見^み多^{おほ}愁^{しうれ}

善相公

岩つよじ折りもてぞ見るせこがきる

くれなるぞめのきぬに似たれば (後拾遺)

泉式部

こころとちれる
我心から散ら
んとして散るに
あらず風に吹き
散らさると也

歎冬

病雀一楊寶が黄
雀を救ひし故事
をさす

養得昔令扶二病雀一
開來本是待二蛙鳴一
八重濃艶人相貴
一片疎葩世所レ輕

保胤

はるがすみるでの河なみたちかへり

見てこそ行かめやまぶきのはな (後撰)

順

さは水にかはづ鳴くなり山吹の

うつろふかけや底に見ゆらん (拾遺)

藤

紫茸一紫藤の英
也、論語の「子曰
惡紫之奪朱
也」の語を引く

夜深不レ語中庭立
月照二藤花一影上レ階
紫茸偏奪二朱衣一色
應是花心忘二憲臺一

宿楊家
白
紫藤花下作
順

漢帝雲膚凝二岸額一
齊桓衣色洗二波聲一

紫藤霞染池
源亞將

むらさきのくもとぞ見ゆる藤のはな

いかなる宿のしるしなるらん (拾遺)

四條大納言

藤なみのかよれるきしの松は老いて

わかむらさきにいかで咲きけん (家集)

順

夏

更衣

獨騎善馬一銜鏡穩
初著單衣一支體輕
絺衣新製幾千襲
咲殺伶倫竹與絲
櫻いろにそめしころもをぬぎかへて

早春朝歸
白
菅家萬葉

銜鏡一くつばみ
とあぶみ
咲殺一咲は笑
わらふ
伶倫一樂師

けふは待つかな
異本「けふよ
りぞ待つ」

やまほとよぎすけふは待つかな (後拾遺)

泉式部

首夏

長恨春歸無二覓處。不知轉入此中來。

大林寺桃花詩

林蘿深處。趨二清涼。移榭開襟。夏日長。

早夏閑詠
齊名

さかきとる卯月になればかみやまの

ならのはがしはもとつはもなし (後拾遺)

好忠

夏夜

漏一漏刻の水の
したくり

日長夜短。懶二晨興。夏漏遲明。聽二郭公。

菅家萬葉

月沈二蘋藻。銀鈎影。

風觸二松杉。玉軫聲。

池樹消夏

水煙半濕。綺羅冷。

山月初昇。樓閣明。

夏夜池臺望
儀同三司

なつの夜は浦島の子がはこなれや

はかなくあけてくやしかるらん (拾遺)

中務

なつの夜はまだ宵ながらあけぬるを

くものいづこに月やどるらん (古今)

深養父

待つほどに夏の夜いたくふけぬれば

をしみもあへず山のはのつき (詞花)

道濟

端午

五月菖蒲素得レ名。毎レ逢二五日。已成レ靈。

菅家萬葉

あしびきの山ほとよぎすけふとてや

あやめの草のねにたてて鳴く (拾遺)

延喜御製

ね一根音

おなじよどのに
みまきに

納涼

おなじよどのにひけるなりけり (榮華)

輔 尹

緑竹掛衣 涼處 憩 清風展簟 困時眠

池上即事
避暑同

熱惱漸知 隨念 盡清涼 常願與人 同

桂月清明 夏迎一宵之秋 松風蕭颯 晴聞二百

尺之雨

和歌序
明 衡

霜鬢しちがの
髪

君蓄二風情 炎處冷 我垂二霜鬢 夏中秋

納涼
善相公

銜秋水上 千巖冷 礙日林間 六月寒

避暑
橋直幹

扇忘嶺鶴 歸嵐 翅 簾滑 隣鷄報月音

曉夕多清涼
江時棟

杉川のいかだのこのうきまくら

なつはすどしきふしどなりけり (詞花)

好 忠

ゆふされば異
本「ゆふぐれば」

夏山のならの葉そよぐゆふされば

ことしも秋のこよちこそすれ (後拾遺)

源 頼 綱

晩夏

但喜煩暑退
以言

金商一五音の一
也、秋の氣を云

日催二鳥羽 炎暉去 風報二金商 氣味幽

おほあらしきの森の下草しけりあひて

ふかくも夏のなりにけるかな (拾遺)

忠 岑

なつと秋とゆきかふ空のかよひぢは

かたへすどしき風や吹くらん (古今)

躬 恒

花 橘

珠顆形容 隨日長 瓊漿氣味 得霜成

貢橘書懷
白

一株金橘の實は黄色にて古來こがねと形容し來れり

盛夏花留三伏雪。 嚴冬子熟一株金。 宿ちかくはなたちはなほり植ゑじ

題橘樹 齊名

むかしをこふるつまとなりけり (詞花) さつきやみ空なつかしくにほふかな

花山院

はなたちはなに風や吹くらん (後拾遺)

相摸

蓮

露深半染眠沙鶴。 風冷纔薰戲藻魚。

荷香漸歇 齊名

落流濃色秋風脆。 打岸寒聲晚浪香。

秋水落芙蓉 中書王

淵客紆緋應二自輕。 波臣衣錦欲二何歸。

蓮浦落紅衣 保胤

いかにしてはちすのなかに宿るらん

よをうきはにはすむ人もなし

六條宮

郭公

四五月交雲外語。 二三更後雨中音。

四條大納言

深山いでてよはにや來つるほとよぎす

あかつきかけて聲のきこゆる (拾遺)

兼盛

ねぬ夜こそかすつもりぬれほとよぎす

聞くほどもなきひとこゑにより (後拾遺)

小辨

みやこびと寢で待つらめやほとよぎす

いまぞ山べをなきてすぐなる (拾遺)

藤原道綱

螢

翠箔燈籠秋耿々。 碧雲星透曉煌々。

晴螢穿竹見 一條院

みさはー異本
「おもひ」

蘭蕙香邊飄不濕らんけいのかほごりにひるがへつてすうるほは 兼葭色裏亂猶餘けんかいろのうちになだれてなほあまれり
兼葭渚誤二珠還浦けんかのざきはあやまちたまのかへるとうらに 竹葦村驚二燈映虚ちくゐのむらにはおどろくともしびのえいするかきそらに

螢飛白露間
菅三品
同 直 幹

いさり火のまがへる川と見えつるは
なみのよるてふほたるなりけり(續古今)
おともせでみさはにもゆる螢こそ
鳴くむしよりもあはれなりけり(後拾遺)

惟 盛
重 之

蟬

笛郎ー後漢の蔡
邕

笛郎死後罷二琴聲いふらうしてのち やむこのこゑを 可憐松蟬兩混并べしあはれむしやせんふたつながとこんじあはせるこゑを
岸柳綠前驚欲認がらんりのみぎりのまへにおどろいてほつすみぞめん 宮槐風底失何尋きうくわいのかぜのもとにうしなつてなにかたづねん
響絶紅露殘槿下ひびきたえてくれなるほふざん ぎんのもと 吟空綠重老槐間ぎんむなしくしてはみぎりおもしろくわいのあひだ
秋去秋來聞不レ改あきさりあきたつてきけしもす あらたまら 今年聲似去年聲ことしこのこゑはにたり きのこゑに

菅家萬葉
初蟬繞一聲
一條院
雨降蟬聲歇
保胤
蟬 齊 名

うすくやー蟬羽
の薄きより思ふ
人の心の薄情に
ならんと悲む意
に上そへたる也

せみの聲きけばかなしきなつごろも

うすくや人のならんとおもへば(古今)

友 則

つれもなきなつの草葉におくつゆを

いのちとたのむ蟬のはかなさ(後撰)

讀人不知

秋

立秋

涼颯忽扇物先哀りやうへうたちまちにあふいでものをまつかなしむ

應是爲二秋氣早來べしこれなる あきのきの はやくきたる

菅家萬葉

壁蝨家々音始亂へきさよういへ ことはじめてみだる

叢蘭處々葉初開そうらん ところどころはなはきはじめてひらく

同

夜深月桂孤輪影よは ふけぬけつ けいこ りんのかげ

秋淺風槐一葉聲あきはあさしふうくわいのいち 九ふのこゑ

立秋作

都在中

風槐ー風にそよ
ぐるんじゆ

あきたつ日とは宜もいひけり (後撰)
川風のすどしくもあるかうち寄する
なみとともにや秋はたつらん (古今)

讀人不知
貫之

早秋

秋來六日未全秋 白露如珠月似鈎

七月六日菅家

白氏書中収夏部 誰家集裏閣秋詩

早秋 田忠臣

初一葉風穿骨入 第三伏汗謝身分

早秋詩 藤輔昭

あさぢはらたままく葛のうらかぜに
うらがなしかる秋はきにけり (後拾遺)

惠慶法師

なつ衣まだひとへなるうたよねに
こころして吹けあきのはつかぜ (拾遺)

安法法師

第三伏一立秋後の初庚、即ち三伏中の末伏をいふ。うらがなし心悲し、葛の葉は風に吹かれてうらがへるものなれば、うらがへず、うらがなし、うらむなどいひ習へり。

七夕

今宵織女渡天河 朧月微雲一似羅

白

宮人懐私之願 似面不同 墨客乞巧之情

代牛女惜曉更野美材

随分應レ異 争教七夕一縮爲六 更課秋風一計會新

七月六日女言志齊名

泣計二露珠一叢底裏 愁望二月鏡一嶺西含

牛女惜夜闌以言

雲霞帳卷風消息 烏鵲橋連浪往來

乞斷屢風藤相公

似告前行臨浪夕 欲迷歸路隱雲秋

月爲渡河媒菅忠真

契りけんこころぞつらきたなばたの
年にひとたびあふはあふかは (古今)

友則

あふはあふかは逢ふ位が逢ふといふ内に數へられんや

懐私一ひそかに胸の中にて念ずるおもひ随分一あふな人々をれ相應に

かへさでぬるやこよひなるらん (後拾遺)
いたづらにすぐる月日をたなばたの
ぬるよの數とおもはましかば (拾遺)

堀河右大臣
惠慶

秋興

秋風一箸鱸魚膾。張翰揺頭喚不歸。

白

山水秋深若雲夢。者有二八九。煙嵐日暮記風物。

以難

大井川和歌序
江匡衡

涼風寫得巖松韻。暮雨偷將瀧水聲。

賦秋思
野美材

荒院珠簾閑卷色。遠營風旆重翻聲。

秋涼風露冷
以

踏露路迷紅葉色。迎風衣染紫蘭香。

嵯峨秋望
爲

梢鴈陣穿秋霧。山脚人家帶夕陽。

同
同

張翰晉人、下文は其鱸膾を思ひて官を辭し歸郷せし有名なる故事にとる。雲夢云々、雲夢は大澤の名、前漢司馬相如傳に「吞若雲夢者八九」といへるに出づ。

なべにーにより

露滴二暗叢螢火濕。風吹二曲岸鶯絲寒。

林池秋興
以言

あきの野に機おるむしのあるなべに

からにしきとも見ゆる野べかな (拾遺)

貫之

秋晚

入レ樓早月中秋色。遠レ郭寒潮半夜聲。

方千

ひとり居てながむるやどの萩の葉に

かぜこそわたれ秋のゆふぐれ (詞花)

道濟

秋夜

早葦鳴復歇。殘燈消又明。隔窓知二夜雨。

秋夜
白

蕉先有聲。

向子期一名は秀、晉人

壯齒一齒は齡の意、さかんなりしよはひ

上陽宮一白樂天上陽日髮人の詩の句に「秋夜長夜長無寐天不明」にとる
ことならぬ一異本「かはらぬ」

梁鷄栖而遲唱。笛吹向子期之隣。漢月臨而難。對月遠情多。齊名

暗風飄。幌影。殘溜滴。階聲。壯齒今何在。秋夜後中書王

宮漏高低風北送。隣砧緩急月西傾。秋夜偶作同

枕欹。隣笛清商曲。窓對前林暗淡紅。漫々秋夜長

萬事皆非燈下淚。一生半暮月前情。秋深知夜長。藤有信

上陽宮裏天難曙。散騎省頭夢易驚。能宣
草のうへにおきこそあかせ秋の夜の
露にことならぬ我身とおもへば
ながしとも思ひぞはてぬむかしより
あふ人からのあきの夜なれば (古今)
躬恒

十五夜 附月

八月十五夜 白

花陽洞一齊の陶弘景致仕して茅山に入り華陽隱居と稱し三層樓を造りて栖む

花陽洞裏秋壇上。今夜清光此處多。八月十五夜
長安十二街。皆踏萬頃之霜。高宴千萬處。各
得一家之月。八月十五夜映池秋月明 善相公

三十五名之星躔。遙浮於水鏡之面。五萬四千
之土壤。自化二冰壺之心。八月十五夜清光千里同 都在中

螢火幽光消不見。鷺絲寒色混難尋。同池邊翫月 橋正通
晝夜和同。迷漏刻。乾坤洞朗。照立黃。同翫月 後中書王

南門曉到東西路。八月秋深十五天。同
琴詩酒客千家思。三十六旬一夜情。以言

いつとても月みぬあきはなきものを

化永壺之心。清くすみ渡りたるをいふ
玄黃一天地
三十六旬一三百六十日一年

三十六旬一三百六十日一年

八月十五夜 四條大納言

わきてこよひのめづらしきかな (後撰)

好忠

月

鳳凰池—中書省をさしてふよ

親故 適回 駕

妻奴 未出 關

鳳凰池 上月

送

我過 二商山

老住 香山 初到 夜

秋逢 二白月 正圓 時

從今 便是 家山 月

試問 二清光 知不知

吳人 棹而 高歌 江波 水潔

荏馬 嘶而 欲惑 野

草霜 深

商人 棹雪 歌二漁 浦

老將 踏霜 立二戎 樓

遊子 不歸 鄉國 夢

明妃 有淚 塞垣 秋

砧添 二鄉 淚孤 營外

鶴照 二臯 聲一舉 中

望月 遠情 多 名

同 同

同 同 源 孝 通

山川 千里 月 昭

明妃—漢の王昭君をさふ

荏馬—荏は草を茹ふこと

峴亭碑—峴は山名也、晉の羊祜の蹟に於る墮淚碑のこと
爐臺云々—白樂天の草廬を構へしをいふ

陶君 門舊 秋霜 鏤

陳后 閨疎 曉雪 深

鄉國 眇茫 孤戎 曉

生涯 零落 五湖 秋

鄉淚 灑霜 孤館 曉

客夢 驚雪 戎樓 秋

蓋嶺 絃聲 調二白 雪

峴亭 碑字 書二秋 霜

楚臺 風度 吹二秋 雪

魏闕 天明 倒二曉 霜

銀漢 無雲 蘿洞 曉

爐峯 有雪 草堂 秋

ひとりるて月をながむるあきの夜は

なにごとをかはおもひのこさん (千載)

後中書王

眺むるにもの思ふことのなぐさむは

月はうきよのほかよりや行く (拾遺)

大貳高遠

すむ人もなきやまざとの秋の夜は

月のひかりもさびしかりけり (後拾遺)

藤原範永

九日 附菊

菜更一ぐみ、九月九日の節物の一

蟋蟀聲寒初過雨 茱萸色淺未經霜

九日 白

芬芳染唇然後知中腸之已飽 氣力補性

然後期天年之難終

觀群臣賜菊花 紀家

賜在帝恩含湛露 出從天意混流霞

同 同

便探孤叢秋露稱 非祖五柳曉雲孫

同 菅家

なが月のことのかごとにつむ菊の

花もかひなくおいにけるかな (拾遺)

躬恒

花も云々一菊花は齡を延べ老を若ゆといへど其甲斐もなく老いはてたる哉

菊

九月廿七日 孰不謂之盡秋 孤叢兩三莖孰

不謂之殘菊

菊是孤叢臣 數代戴霜共立玉欄前

秋色亂菊 菅 殘菊應製 清慎公

東籬方遇南薰主 最弟被知季曆兄

菊是花聖賢 以言

范蠡長男凡草老 韋賢少子一叢殘

菊爲花最弟 佐國

粧誤崑山金骨相 葩迷姑射雪膚名

菊開似遇仙 藤敦宗

姮娥夜々應偷艷 方士年年欲採粧

菊花爲上藥 藤行家

道士試嘗寒岸露 仙雞誤舐曉籬霜

同 有信

あさまだき八重さく菊のことのへに

見ゆるはしものおけるなりけり (後拾遺)

長房卿

めもかれず見つくらさん白菊の

はなよりのちの花しなければ (同)

伊勢太輔

東籬云々一陶淵明の菊を愛せしこと 韋賢一漢宣帝の時丞相たり 姑射一藐姑射の山、仙人の居る所 姮娥一姮或は嫦娥と書く、月の異名也

九月盡

一年云暮窮秋纔留於半日之間。百卉盡零。

殘菊猶開於繁霜之後。

那堪漸々鐘聲暮。挑盡寒燈夜半花。

路非山水誰堪趨。跡任乾坤豈得尋。

みやまよりおちくる水のいろ見てぞ

秋はかぎりとおもひしりぬる (古今)

をしめどもたちもとまらぬ物ゆゑに

たゆげにまねく花すよきかな (拾遺)

女郎花

をしめども一異本「招くとも」
たゆげにまねく一異本「あはれかたよる」

比方一たくらふべきもの

一叢百朶入レ秋發。黄色花中無二比方。

天生二花麗一粧。還冷。地與二英靈一色方黃。

野邊にやこよひたびねしなまし (拾遺)

をみなへしかけをうつせば心なき

水もいろなるものにぞありける (後拾遺)

萩

一秋有レ藥號二芽花。麝子鳴時此草奢。

秋風はすどしくなりぬこまなべて

いざ野に行かんはぎのはな見に (新拾、萬葉)

ぬれくもあけばまづみん宮城野の

詠庭前女郎

以言

長能

堀川右大臣

菅家萬葉

人丸

もとあら一本の
まばらなる意

古代歌謠集

三三四

もとあらの萩やしをれしぬらん（家集）

長能

蘭

波なみ句は遠とほく覺さざりぬ吹ふく秋あき水みづ雨あめ染そめて高たかく和わす動うご暮く雲うん

蘭氣入輕風
菅三品

魏ぎ宮きやう名な顯あらは三さん臺たい月づき燕えん夢ぼう子こ傳つた萬まん代だい風かぜ

蘭以香爲貴
以言

爲せん深ふかし爲せん淺あさし風かぜ聲こゑ暗くら何いづ紫れか何むら紅さき露いづ影れか秋なる

夜蘭不辨色
同

やどりせし人のかたみにふぢばかま

わすられがたき香にほひつよ（古今）

貫之

槿

籬まがき薰くんじて殘ざん槿きん抽ぬき紅んで濕ぬる池いけ馥かう早は荷しやう與して玉は醜さう

秋露草花香
保胤

おきて見んと思ひしほどにかれにけり

けなる一なほ一
層もさき

露よりけなるあさがほのはな（新古今）

好忠

ありとてもたのむべきかは世の中を

しらするものはあさがほのはな（後拾遺）

泉式部

前栽

南内、落葉、原
詩一に「南苑、宮
葉」に作る

西せい宮きやう南なん内だい多おほ秋しゆ草くさ落らく葉えふ滿みち階はし紅にく不はら掃は

長恨歌
白

子し月ひつ齊じ名な傳つた早は艶えん南なん風ふう栽たく織を領りやう新しん粧さう

秋花先秋開
後中書王

榮えい枯こ大おほ底そ任ま園えん露ろ早さう晚ばん由よ來き屬ぞく野や煙えん

秋花次第開
一條院

みどりなるひとつ草とぞ春は見し

あきはいろくの花にぞありける（古今）

忠岑

紅葉

新撰朗詠集

三三五

紅葉又紅葉蓮峯之嵐淺深 蘆花又蘆花斜岸
之雪遠近

素髮一日髮

紅林定有重青日 素髮應無二更綠 春

紅葉嵐深窓暗雨 蒼花日暮鬢寒霜

山雲秋後隔霜觸 野客朝來穿錦料

いかなればおなじ時雨にもみぢする

はよその森のうすくこからん (後拾遺)

いづくにか駒をとどめんもみぢ葉の

いろなるものぞこころなりける (家集)

落葉

落葉俟微風以隕風之力蓋寡 孟嘗遭雍門

うすくこからん
或は薄く或は
濃きならん

雍門雍門子周
琴を以て孟嘗君
苑に見えし故事説
苑に出づ

而泣琴之感已未

征馬鳴珂秋踏仙家之雪 宿禽斂翅夜栖

枝之風

寒猿抱木唯携月 暮鳥歸林不宿紅

潭色變來秋月後 浪文燒盡暮煙中

瑠璃色變難籠月 纈纈花寒被織風

莓苔變綠林間露 麋鹿踏紅洞裏秋

虛澗嵐飄山未曙 空階雨脆月初傾

こがらしのおとに時雨をきよわかで

もみぢに濡るよたもととぞみる (新古今)

山ふかみおちてつもれるもみぢ葉の

かわけるうへに時雨ふるなり (詞花)

豪士賦序文選 陸士衡

落葉賦 齊名

葉下風枝疎 順

落葉泛寒流 同

落葉水初紅 英

山深落葉多 長

夜深聞落葉 藤有信

後中書王

嘉言

紅散りたる紅葉

この葉ちる宿はきよわくことぞなき

しぐれする夜もしぐれせぬ夜も (後拾遺)

源頼實

鴈

江柳影寒新雨地。塞鴻聲急欲霜天。

夢中鄉信驚秋鴈。窓下林聲帶夜蟬。

鴻聲斷續暮天遠。柳影蕭疎秋日寒。

若耶風北來賓響。沙漠日西逆旅聲。

驚弓斜避三更月。引槽遙過萬里雲。

便混商風添雅韻。遙辭朔土入琴聲。

さよふかく旅のそらなるかりがねは

おのが羽かぜや夜寒なるらん (後拾遺)

伊勢大輔

贈江客

白

寓居

楊巨源

暮天聞遠雁

李順棟

幾行寒雁多

村上御製

雁聲遠和琴

綱

歸鴈

數重影底橋南絕。一片膚中字北飛。

うす墨にかくたまづさと見ゆるかな

かすむゆふべに歸るかりがね (後拾遺)

津守國基

歸雁浮青雲

藤有信

蟲

草間蟲響臨秋急。山裏蟬聲薄暮幽。

野煙秋深任馬蹄而優遊。叢露日暮尋蟲聲。

而徙倚。

絡絲響冷秋夢短。飲露聲幽晚思深。

吟急殘燈光正背。夢驚孤枕淚難乾。

早秋山中作

王維

和歌序

成國

恭思蟬聲滿耳秋

胤

蟋蟀近床聲

言

橋、字、雁行の形容

かすむゆふべに異本「かすめるそらに」

徙倚—たちもとほる、楚辭「獨徙倚而彷徨」絡絲—紗維(キリギリス)

嬬さう閨けい枕まくら冷さむ吟うた風かぜ曉あけ孤こ館くわん夢ゆめ殘のこ怨うら雨あめ秋あき

夜閑只聞よのひらだけきこ菴あま堀河右大臣ほりがわのみなと

かしがましのもせにすだく蟲のねに

われだにものをいはでこそおもへ

なげやなげ蓬よもぎがもとのひきがへる

すぎゆく秋はけにぞかなしき（後拾遺）

好忠

鹿しか

秋山寂々しゅうざんじやくじやく葉零々はれいじやく麋鹿鳴聲びろくのなくこゑ屢更聆しばしばきこ

菅家萬葉

憶嶺鹿歸溪霧底おもふるねしかはかへりけいじゆもきト林鳥入しほるはやしをさりはいる夕陽端ゆゆうのはし

嵯峨秋望さあがあきぞら高相如

しかのねぞねざめの床にきこゆなる

をの草ぶしつゆやおくらん（後拾遺）

家經

つゆむすぶ萩がした葉やさむからん

あきの野はらにをじか鳴くなり（續千載）

相摸

露つゆ

看取風流何所似かんしゆふうりういづれのどこかにに瑠璃盤底水精丸るりばんていすいしやうのぐわん

荷上露かみづつゆ高五常

蒼葭夜色添銀液さうかのよるのいろはそへぎんえきを翠竹秋粧すゐちくあきまけ任玉装まかせたりぎよくしやう

白露凝はくろてい慶幾

鳴きわたるかりの涙やおちつらん

ものおもふ宿の萩のうへのつゆ（古今）

わがそでに露ぞおくなるあまの川

くもの柵しがらみなみやこすらん（後撰）

霧きり

淺深猶暗千峯曉せんしんなほくらしせんほうのあかつき濃淡難分五里朝ぢようたんがたしわかちごりのあした

秋霧籠紅樹あききりかごうに源相方

五里朝一霧のた
てる朝、後撰書
に「張楷字公超

性好道術能爲五里霧」といへるに出づ

はれじな一異本「はれせじ」

賓鴈云々一蘇武の故事漢書蘇武傳に「天子上林苑中に射て鴈を得たり、足に帛書を係くるあり、言ふ藥の澤中に在りと」

あづまぢに入りにし人のこひしきに
あふさか山はきりこめてけり
とりつなけみつの原のはなれごま
よどの川霧あきははれじな

惟成

長能

擣衣 たうい

賓鴈繫書飛上林之霜 忠臣何在寡妾擣衣

泣南樓之月良人未歸

願文 江都督

擣自金颺秋暮冷 催於素月夜來晴

擣衣詩贈鄰都在中

色爭霜葉辭林色 聲混雲鴻出塞聲

擣衣明月中菅在良

客路霜乾秋韻遠 婦閨雪冷曉聲寒

月前聞擣衣藤友房

雪中絶盡幽人夢 霜後添來旅鴈聲

うたよねに夜やふけぬらんから衣

うつこゑ高くなりまさるなり (後拾遺)

藤忠房

冬

初冬

蕪々草の盛なる貌

霜輕未殺蕪々草 日暖初乾漠々沙

初冬 白

清洛曉光鋪玉簾 上陽霜葉剪紅綃

劉禹錫

四五株楊經雨色 兩三叢菊飽霜花

蕭條秋後色 齊名

あしの葉にかくれてすみしつの國の

こやもあらはに冬はきにけり (拾遺)

貫之

冬夜

こや一地名の昆陽に小屋を掛く

曙硯一曉方硯の
水の氷れるによ
りての意

爐火欲消燈欲盡
夜長相對百憂生
夜衣漸識千山雪
曉硯初語四海寒

しもおかぬ袖だにさゆる冬の夜は
鴨の上毛をおもひこそやれ (拾遺)

四條大納言

歲暮

卷簾松竹雪初霽
滿院地塘春欲廻
急於流水無廻浪
去似奔車幾轉輪

荏苒歲之暮
劉禹錫
後江相公

なれども一異本
「とちもふに」

あはれにもくれゆく年のひかすかな

かへらんことは夜のまなれども (千載)

相摸

爐火

心灰一冷灰の
如く老いて情火
の滅したるをい
ふ

心灰不及爐中火
碧氈帳上正飄雪
遠憐珠砌銀華亂
紅火爐前初炷燈

冬至夜
夜招晦叔
愛火懷雪
同順

はひにのみくだく心をいかにせん

かきあらはさぬ夜半のうづみ火

相摸

霜

寒月曉殘期皎潔於花表之頂
守凄清於瓦溝之中
初陽旦照

青女司霜賦
紀家

林巒織著黃絲纈
沙渚瑩來白水精

早霜
鐘聲應霜
紀家

寒鳴自應三危結
暗落先和五夜清

霜閨落葉多
紀家

寒鞭駟去紅難駐
曉刃裁來錦不完

霜閨落葉多
中書王

うち拂ふともねならねばをしどりの

うは毛の霜もけさはさながら (家集)

泉式部

雪

瘦公一昔の瘦亮
孫子夜書一孫康
雪に照して書を
讀みし故事

秦客訪花驚出洞 瘦公看月誤登樓

班姬秋扇已亡色 孫子夜書獨有明

闇夜猶行明月地 人間却踏白雪天

胡塞嘶花遙去馬 巴山歌月遠行人

地白猶迷停午影 山明不信落西光

やまざとは雪ふりつみてみちもなし

けふこん人をあはれとは見ん (拾遺)

待つ人のいまもきたらばいかどせん

翫雪 何 玄

早雪 弘仁御製

禁中雪 田忠臣

雪飛千里外 爲 時

江都督

兼 盛

ふまよくをしき庭のゆきかな (詞花)

泉式部

雪ふかきみちにぞしるき山ざとは

われよりさきに人こざりけり (後拾遺)

藤經衡

氷

石髪 迥來風 未櫛 水衣 黏後浪 難縫

光 難鑿 古春消處 背似有龍魚負程

いはまにはこほりの轄うちてけり

たまゐの水もいまはもりこず (後拾遺)

好 忠

春氷

春來日 暖 危 心立 曉 後霜凝 踏 足行

履薄氷 橋 廣 相

石髪、水衣一共に
陟釐即ちあを
さといふもの
異名、本草綱目
に、水中の石上
に生ずる物有り
て其狀髪の如
く、水不潔にて
石無きに生ずる
物あり其狀絲綿
の如しといへる
是也

狐聞一狐は性疑
ひ深く氷下の水
音を聞きて後渡
るといふに由る

長河チヤウカ暗沖アンシュウ狐聞急コウブンキウ古渡コト偷穿馬踏危トウセンバダツキ

春水水解
紀家

はるかぜに澤のこほりやとけぬらん
けさやまかはの水まさりけり

具平親王

霰あられ

日微霰
菅家

舍利一骨也、佛
骨の意

念佛山僧ネンブツノサン驚二舍利オドロクニシヤリ名醫道士メイイノダウシ惟二銀丸タカニギンガン

竹の葉にあられふる夜のさむけきに
ひとりばねなんものとやは思ふ(千載)

馬内侍

佛名ぶつ みやう

道場夜半ドウジョウヤハン香花冷ケウカレイ猶在二燈前ナホアツテモシビノマヘニライ禮二佛名レイニブツミヤウ
懺二抛業障サンハウシテゴウシヤウサ氷消地ヒヤウシヨウチ破二却無明ハキヤクシテケムメイ日上天ニツノホラテン

良春通

年のうちにつもれる罪はかきくらし

降るしらゆきと共にきえなん(拾遺)

貫之

ゆきつもるおのが年をばしらすして

春をばあすと聞くぞうれしき(同)

重之

新撰朗詠集 卷下

雜

風

列子一風に御して行くといへる故事、朗詠集の風の條參照

陸惠曉一齊人也、張融と並び住む、其間池あり柳あり
魯聖云々一孔子、論語先進篇に孔子弟子に志を曰はしめし時、點が「暮春者春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、

雲霧輕身窺列子之此駕一 澗泝授手問宋人

清風戒寒序 菅家

沙鷗之眠易驚陸惠曉之柳拂地 浦月之影漫

水岸清風至 齊名

迎晴拂盡墻陰雪 解凍翻來岩曲波

風波請春意 後中書王 有風終夜涼 以言

枕冷唐妃專幸裏 襟翻魯聖以思程

かをだにぬすめはるのやま風 (古今)

遍昭

わがせこが來まさぬ宵のあきかぜは

來ぬひとよりもうらめしきかな (拾遺)

好忠

雲

風乎經雲詠而歸といへるに對し、孔子喟然として「吾與點也」といひし故事

月知溪靜尋常入 雲愛山高一旦暮歸

懷舊 齊名

聚散隨身非出岫 低昂逐步豈由風

觀雲知隱 善相公 行雲思故鄉 庶幾

戀石唯念初觸色 離溪不忘昔栖心

宇治別業即事 儀同三司

あまのはら春はことにも見ゆるかな

雲のはたてもいろまさりけり (菅家萬葉)

菅家

晴

金風一秋風

幽人一隱者

雲際日光分三萬井煙消山色露二千峯
天台嶺前四十五尺之泉曝布洛陽城外三十
六峯之黛聯綿山晴秋望多齊名

野鶴一冲晴後失塞鴻數點望中銷

應分一舉鶴毛羽欲計數行鴈弟兄

金風吹拂青山極銀水洗除碧海香

あまの川あふぎのかぜに霧はれて

そらすみわたるかさよぎのはし(拾遺)

曉あかつき

愁うれへしむれはし思婦於深窓輕紗漸白眠ねがらしむれはいう幽人於古屋をくに

暗隙纔明あんけきわづかにあきらかなり

曉眠謝

觀

元

輔

以

言

同

胤

高天澄遠色

村上御製

天秋無片雲

保胤

山晴秋望多

名

齊

胤

元

積

曉上天津橋

白

上陽宮裏曉鐘後天津橋頭殘月前
孤帆飛而不留黃石公授履之後五馬嘶而欲ほつす

去さりなんごまう孟嘗君出關之程ほぎ

聞鐘起問山高卑隔燭看迷鴈後先

星翻空拂槿花露月落暗聞蘆葉秋

ありあけのつれなく見えしわかれより

あかつきばかりうきものはなし(古今)

忠

岑

松まつ

澗底松搖二千尺雨庭前竹撼二窓秋

搖窓竹色留僧語入院松聲共鶴聞

秦皇泰山之雨風消黃雀之路周穆長坂之

楊

巨源

杜

荀鶴

晴風臨曉來

衡

曉色未分明

元

客別期曉後

生

黃石公一張良少時下邳圯上遊びし時履を圯下に墮し良に命じて之を取らしめ、後遂に良に兵書を授けし老人

秦皇云々始皇帝泰山を封じたる時疾風暴雨に

逢ひて松樹に雨
やどりし、因り
て其樹を封下て
五大夫となした
る故事、次の秦
爵もこれに因り
て松の稱とせる
也
吳人云々、吳の
季札徐君の家樹
に徐君が生前心
竊かに望みし己
の劍を繫けし故
事

雲汗。收。赤。驪。之。溝。

秦。爵。琴。聲。調。白。雪。

沙。雨。荷。開。交。蓋。影。

すみよしのきしの姫松ひとならば

いくよかへしと問はましものを (古今)

大原や小鹽のやまのこまつばら

はや木高かれ千代のかけみん (後撰)

ゆく末のしるしばかりにのこるべき

松さへいたく老いにけるかな

竹

西叢。七莖勁。而健。省。向。天。竺。寺。前。石。上。見。

松聲當夏寒序

夜月照高松

松綠臨池水

有

言 衡 信

讀人不知

貫 之

道 濟

叢。八莖疎。而且寒。憶。會。湘。妃。廟。裏。雨。中。看。

千。花。萬。草。凋。零。後。

柯。亭。月。閑。雲。過。蔡。氏。之。曲。

玉之詞

長竿冒雪。白龍蟠。能。瀝。虛。心。獨。苦。寒。

竹のよもわが世もいたくおいにしを

うらはさやにもおける霜かな (續古今)

畫竹歌

白

同

辨松竹策

見庭竹雪

良 春 通 言

菅 家

草

荀。令。見。君。應。向。我。爲。言。秋。草。閉。門。多。

消。盡。雪。青。湖。寺。路。霧。來。煙。綠。洞。庭。砂。

湖。邊。人。踏。三。分。綠。塞。外。馬。嘶。一。道。煙。

遠草初含色

同 齊 名 昭

うらは一異本
「くちば」

蘭臺一楚の襄王
此に遊ぶ
宋玉一襄王に侍
し風賦を作る

楓松堤是菰蔣地。木落秋還岸暗春。

草長江湖春以言

吳郡望青風放馬。杭州道綠月行人。

同

なつ草はむすぶばかりになりけり

のがひのこまはあくがれぬらん (後拾遺)

重之

おほあらしのもりの下草なつくれば

かる人なしにしけるころかな

忠岑

鶴

花亭風裏依々鶴唳猶聞。巴峽雨中悄悄猿啼

曉賦謝觀

望廻翔於蓬嶋霞袂未逢。思控馭於茅山霜

鶴鳴九阜藤雅材

毛徒老

蘭岸月冷聲彌亮。蕙帳雲空怨幾殘。

霜天開夜鶴波澄鶴影保胤

初疑二波面孤雲宿。更誤二沙頭片月殘。

鶴是作仙禽都督

秋雲歸洞千年駕。白日昇天一舉情。

いづる一出、鶴

おもひいづるの鳴くぞかなしき

貫之

あしたづの立てる川べにふくかぜは

よせてかへらぬ波かとぞみる (古今)

宇多御製

みる一異本「思ふ」

猿

巴峽猿聲催客淚。銅梁山翠入紅樓。

李嘉祐

吳岫雨來溪燕浴。楚江雲暗嶺猿吟。

許渾

峽裏猿鳴悲又清。況聞薄暮第二聲。

猿叫峽善家

ひぢぬる一異本
「ぬれぬる」

臨水館連江雁翼。枕山樓入峽猿聲。
あきやまのかひにみかへりなく猿を

夜ふかく聞きて袖ぞひぢぬる (家集)

管絃

間關一鳥聲の高
低屈曲をいふ

間關鶯語花底滑。幽咽泉流冰下難。

絃中恨起湘山遠。指下情多楚峽流。

琵琶行
聽琴
蘇替

秋月夜閑聞案曲。金風吹落玉簫聲。

金吾

畫扇月落秋調白雪之聲。青玉燈殘風傳二昭

管絃臨曉清
寒夜撫鳴琴
天曆御製

花之曲

寡鶴怨長夢自斷。寒鳥啼苦漏猶深。

入松風響春吹夢。落峽泉聲暗灑心。

雅量

あきの夜は人をしづめてつくぐと

かきなす琴のねにぞなきぬる (後撰)

是貞親王

文詞 附遺文

收二百代之闕文。採千載之遺韻。觀古今於須臾。

文賦
陸士衡

撫四海於一瞬。

聲々麗曲敲寒玉。句々奸詞綴二色絲。

白

春霞秋月潤艷流於言泉。花色鳥聲鮮二浮藻於

新撰和歌集序
紀貫之

我聞相如瞻文。家徒四壁立。又聞孫弘高

老閑居
管三品

才。年此八旬行

文路春行看不足。詞林秋望老彌深。

未飽風月思
儀同三司

相如一漢人、司
馬氏其賦二十九
篇傳
家徒四壁立一家
貧しくして家財
なきをいふ

班扇—班婕妤の團扇を詠じたるをいふ

虚無責得林花色。寂寞求來谷鳥聲。
班扇長襟秋不盡。楚臺餘味老彌深。
あはれてふことのはごとにおく露は

むかしをしのぶなみだなりけり (古今)

詩情被動春
高樓夜宴文難明
天曆

酒

菟園—梁の孝王の園
玄圃—崑崙山にあり

香醪淺酌浮如蟻。雲鬢新梳薄似蟬。
能消二忙事一成二閑事。轉得二憂人一作二樂人。
酒軍在座菟園之露未晞。僕夫待衛鷄籠之山
欲曙。
菓則玄圃之梨。折西枝兮置机。酒是青州之
竹。酌上葉而滿樽。

花酒
家醞同
望月遠情多
寒花爲客栽
衡

杜康—古へ酒を作し人

縱無二醉面將桃競。暫有二愁眉與柳開。
荆籬客醉斜吹菊。柴戶人稀緩酌蘭。
人喜二樽中春氣湛。鳥思二盃底晚香分。
杜康昔構容二人息。陶令重來寄我生。
藍水應無二冰互思。玉山唯有二雪消情。
めづらしき光さしそふさかづきは

逢花傾一盃
載酒訪幽人
花榮酒中新
唯以酒爲家
依醉忘天寒
成

もち—望、持ち
千たび—異本「千代も」

山 附山水

千峯黛色因晴出。百谷泉聲欲暮空。
煙消二茶竈廚兒睡。日落二松巖二野鶴留。
鹿鳴猿叫孤雲慘。葉落泉飛片月殘。

山閑人事少
秋聲多在山
後中書王

紫式部

竈山—美濃

巫女嶺南行雨冷。鄭公谿北遠嵐餘。
はるはもえ秋はこがると竈山

暮山景氣寒
明 衡

かすみも霧もけぶりとぞみる (拾遺)
おもひでもなきふるさとの山なれど
かくれゆくはたあはれなりけり (拾遺、詞花)

重 之
嘉 言

山水

左 據函谷二嶠之岨表。以太花終南之山。右
界褒斜隴首之嶮帶。以洪河涇渭之川。
墨水澄時潭底出。白雲破處洞門開。
尼父之一望也。歎龜山之蔽。魯。靈均之五願也。
也。繞沅湘而傷楚。

西都賦
班孟堅
白
菟裘賦
中書王

尼父—孔子
靈均—屈原

張博望—漢の博
望侯張騫

張博望之至牛漢。沂二十萬里之濤。伯司空之鑿
龍門。遺二千年之跡。

辨山水策
澄 明

松江月落漁舟去。蘿洞雲開隱逕深。
客帆有月風千里。仙洞無人鶴一雙。

雨晴山川清
雅 材
江山此地深
惟 成

彭蠡—洞庭のこ
と

滄浪—滄浪之
水清兮可以濯
我纓。滄浪之水
濁兮可以
足。

潭心月映金波漲。嶺面雲開翠黛織。
舟隨彭蠡鴈聲去。鳥踏驛陽桐葉一行。
滄浪歌白雪飄曉。雲雨夢香風脆春。
あしびきの山した水のがくれて
たきつころをせきぞかねつる (古今、後撰)

晴後山河清
入道大納言
秋色變山水
源右相府
花瀧江山衰
澄 兼

水 附漁父

影浸南山青。混漾波沈西日紅。齋淪

混明春水滿
白

潯陽楓葉一白樂
天琵琶行「潯陽
江頭夜送客、楓
葉荻花秋瑟瑟」
の句による

石竇寒泉秋眼泣。 銀河晴色曉顏清。
只照形容難照思。 含情空問影中人。
青草湖圖波寫得。 白蘋洲樣岸相傳。
細浪沙來填鷺跡。 喬枝日落入蟬聲。
舉帆往反秋風送。 轉棹東西夜月隨。
傾得菰蘆三數酌。 高歌不信有公卿。
洲蘆浪碎驚花白。 岸樹日藏省葉紅。
潯陽楓葉帶霜碎。 蓋嶺泉聲穿雪流。
きみが世にあふくま河のみづきよみ
そこにぞ見ゆるよろづよのかけ (詞花)
世にすまばまたも見にこん大原や
おほろのしみづおもがはりすな

池亭宴飲 都良香
監山水 紀 林家
林池眺望 英 明家
林池 在 列
釣魚翁 善 家
漁人 保 胤
水氣先秋冷 以 言
明月照江山 都 督
入道殿 能 宣

禁中

五夜漏聲一五更
を報ずる漏刻の
聲

五夜漏聲催二曉箭。 九天春色醉仙桃。
渚宮東面煙波冷。 浴殿西頭鐘漏深。
九重城裏春來早。 百尺樓頭日落遲。
殿庭之甚幽。 吟三嵩山之逢二鶴駕。 風景之最好。
嫌三曲水之老。 鶯花。
通籍重門踏彩霞。 而失レ歩。 登レ仙半日問二青鳥。
而知レ音。
仙籍是重。 暫降二蓬萊。 萬里之雲。 高材不拘誰。
待二豫樟七年之日。
いにしへのならのみやこの八重ざくら

八月十五夜禁中 白
崔 瞻
青娃無氣力 菅 家
同 同
松竹策 以 言
三五

豫樟一又豫章、
くすの木の類、
子虛賦の顔註に
「豫章二木、生七
年乃可分別」

あかき—明かに照り輝ける

けふこよのへに匂ひぬるかな (詞花)
こよのへのうちだにあかき月かけに
あれたるやどをおもひこそやれ (拾遺)

伊勢大輔

爲政

故京

六龍—鳳羣のこ

雙鳳北 歸山寂々 六龍西 幸水滔々

望清花宮 許渾

花は云々—異本「花ぞ咲きける」

ふるさととなりにしならの都にも
いろはかはらず花は咲きけり (古今)

奈良帝

故宮 附古宅

銅臺—魏の曹操の築きし銅爵臺

石崇之門客 長辭水流金谷 魏帝之宮人已
散草滿銅臺

愁賦 公乘憶

新豐樹老 籠明月 長生殿 閣鏤黃昏

過天室康叟 白

粧客妓樓 何寥靜 柳似舞腰 池似鏡

兩朱閣 同

隱映朝霧之斷時 南流鷗浴 朦朧秋月之傾處

西堂人稀

今來 恭避人間暑 此處仙皇昔待風

雲深聖主昔遊處 樹老宮人手植時

世事不停 江水逝 垂楊空掃舊門欄

屋舍大荒非舊日 主人一去幾春風

きみましよむかしは露かふるさとの
花みるごとにそでのぬるらん (續古今)

すだきけんむかしの人もなき宿に

たどかけするは秋の夜のつき (後拾遺)

貫之

惠慶

すだき—一本「すみき」

きみまし—一本「思ひいづる」

河原院賦 源爲宣

河原院釣臺避暑 英明

望見淳和院感舊 菅家

過藤相公舊宅 保胤

過伊州舊宅 同

あざぢ原ぬしなきやどのさくら花

こころやすくや風にちるらん (拾遺)

同

仙家 附道士

ひらいてくもをうとるにたまをきらひやまのあさまを
 開レ雲植レ玉嫌二山淺○ 渡レ海傳レ書怪二鶴遅○
 金殿月中看レ擣レ藥○ 玉樓風裏聽レ吹笙○
 玉池露冷芙蓉淺○ 金井煙分薜荔疎○
 四九三十六之天。丹霞之洞高關○ 八九七十二
 之室。青巖之石削成○
 夕巖苔靜 稀二人到○ 曉洞花飛見二鶴遊○
 境傳二方術一長看レ雪○ 籬隔二乾坤一豈怕レ霜○
 藥欄日霽曝二秋雪○ 雲碓水忽 春二曉 霜○

酬嵩丘麻道士 盧 倫
 宿天橋觀 章 孝 標
 玉芝觀 許 渾
 神仙策 都 良 香
 勾曲山屏風 菅 三 品
 仙家菊猶殘 後 三 條
 仙洞菊花多 孝 標

ふるさとは見しごともあらず斧の柄の

朽ちしところぞこひしかりける (古今)

友 則

隱 倫

潁陽之高許由 舜の帝位を己に 遜らんとすと聞 きて潁川に耳を 洗ひし故事 孤竹之潔伯夷 叔齊のこと

堯稱レ天而不屈二潁陽之高○ 武盡レ美矣終全二孤 竹之潔○
 蕙帳空兮夜鶴怨○ 山人去而曉猿驚○ 請廻二俗士 之駕爲レ君謝二逋客○
 明主十徵何謝病○ 煙霞不許作二堯臣○
 孤竹二子之去周○ 春蕨煙老○ 五柳先生之遁レ晉○
 秋菊霜寒○
 漢四皓雖出○ 應曜獨留二於淮陽之雲○ 堯三徵不レ

逸民傳倫 范 蔚 宗
 北山移文 孔 德 璋
 月前閑談 朴 昂
 言

來許由長樓於瀨水之月
心地早銷方寸火
鬢霜鎖帶數莖秋
おちつもる朽葉がしたのみなしぐり

なにかは人にありとしられん

山家

雲生澗戸衣裳潤
嵐隱山廚火燭幽
寂寞柴門人不到
空林獨與白雲期
窓東早月當琴榻
牆上秋山入酒盃
夕陽山影穿窓入
幽澗泉聲向戶飛
門出水唇春浪齧
路從溪口暮雲穿
山開畫障當窓立
水亂羅文繞座流

香爐峰下卜新居

王維

山齋喜春

嵯峨御製

山莊紀

田忠臣

土宜—風土に適する産物

煙藏古竹風中色
雲領飛泉洞裏聲
草創主人雲臥後
竹編客舍雨墮時
馬臺東西遠山路
賓閣南頭明月地
苔庭木落紅無跡
雲碓月晴雪有聲
土宜酒熟酌秋竹
松麴嵐寒聞夜琴
やまざとは秋こそことになしけれ

しかの鳴くねにめをさましつゝ (古今)

忠岑

このころは木々の梢もみぢして

鹿こそは鳴けあきのやまざと (後拾遺)

上東門院中將

田家

携將晚浪孤舟子
染著秋風一箸鱸

田家作 順

幽居春日屏風

菅三品

北山居

四條大納言

右相府白川亭作

儀同三司

仙家秋色多

明衡

江家